

70
170

INTRODUCTION
TO THE
HISTORY OF CHRISTIAN DOCTRINES
PREPARED BY
REV. J. D. DAVIS D. D.

基督教
教理略史

同志社教授デビス著

米國宣教師事務局藏版

序

過ぐる數年間の日本に於ける哲學及神學の論争

と歴史的に研究するの切要を生ぜしめたり、余が二年前

に發刊するに神學之大原理は歴史的の性質を有する頗る

を發刊するの目的ハ一ハ「大原理」の欠を

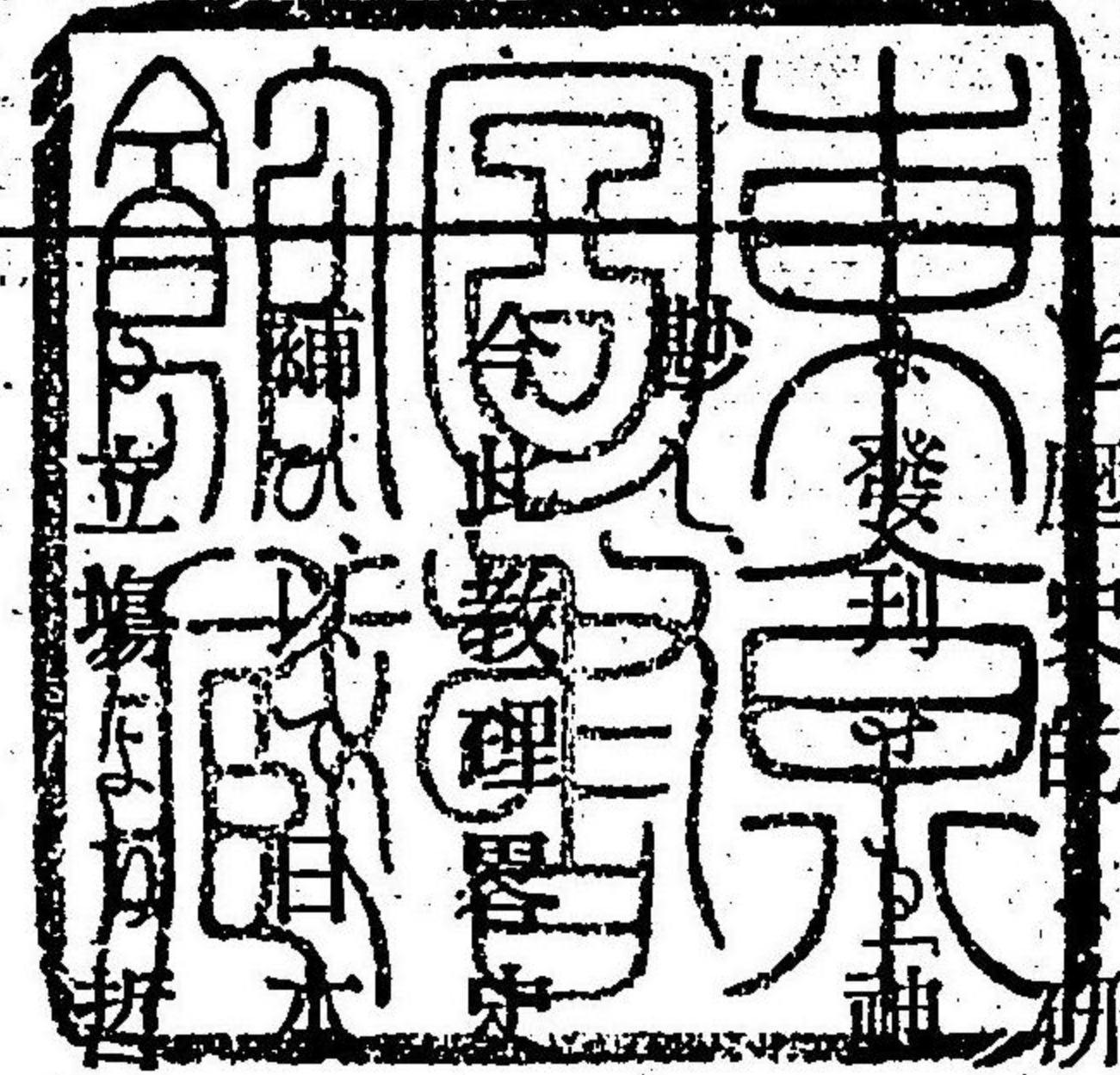
よある眞理探究に熱心なる人物が、正當な

立場より哲學及神學の發達を見而して過ぐる一千八

百年間、特に晚近百五十年間の教理歴史中に含まるゝ大

切なる教訓を學ぶの助をかさんがためなり、

此著述は唯畧史たるに過ぎざ、且畧史としても甚だ不完



全たるを免れず、

若し此書よして、正當なる立場より一層充分此問題を研究するに至るの助をなし、特は吾人の教主が吾人を導きて一切の眞理に至らしむと約束し給へる聖靈の光と導よよりて之を研究するに至るの助をなすを得ば、余が著述の目的は達したるなり、

猶一言を加へん、此著述をなすに當り特は余の助となりたる書籍を擧ぐれば、クリッペン、シエッド及シェルドン氏の教理歴史、リューニス氏の傳記的哲學史、及リロテンベルゲル氏の第十九世紀獨逸神學歷史是なり、

耶穌紀元一千八百九十三年

同志社に於て

ゼー、デー、デビス

基督教々理畧史目次

總論	一
第壹篇 哲學畧史	七
第貳篇 教理畧史	五十五
第一項 初代教會内の異教徒の批評及異端	五十五
第二項 聖書と傳説	六十三
第三項 神性論略史	八十四
第四項 創世説の略史	八十八
第五項 罪惡説の略史	九十八
第六項 キリストの身位説の略史	百〇二
第七項 三位一体説の略史	百三十一
第八項 贖罪説の略史	百三十五

第九項 救拯説の略史……………百三十五

第十項 教會禮典等諸説の略史……………百五十二

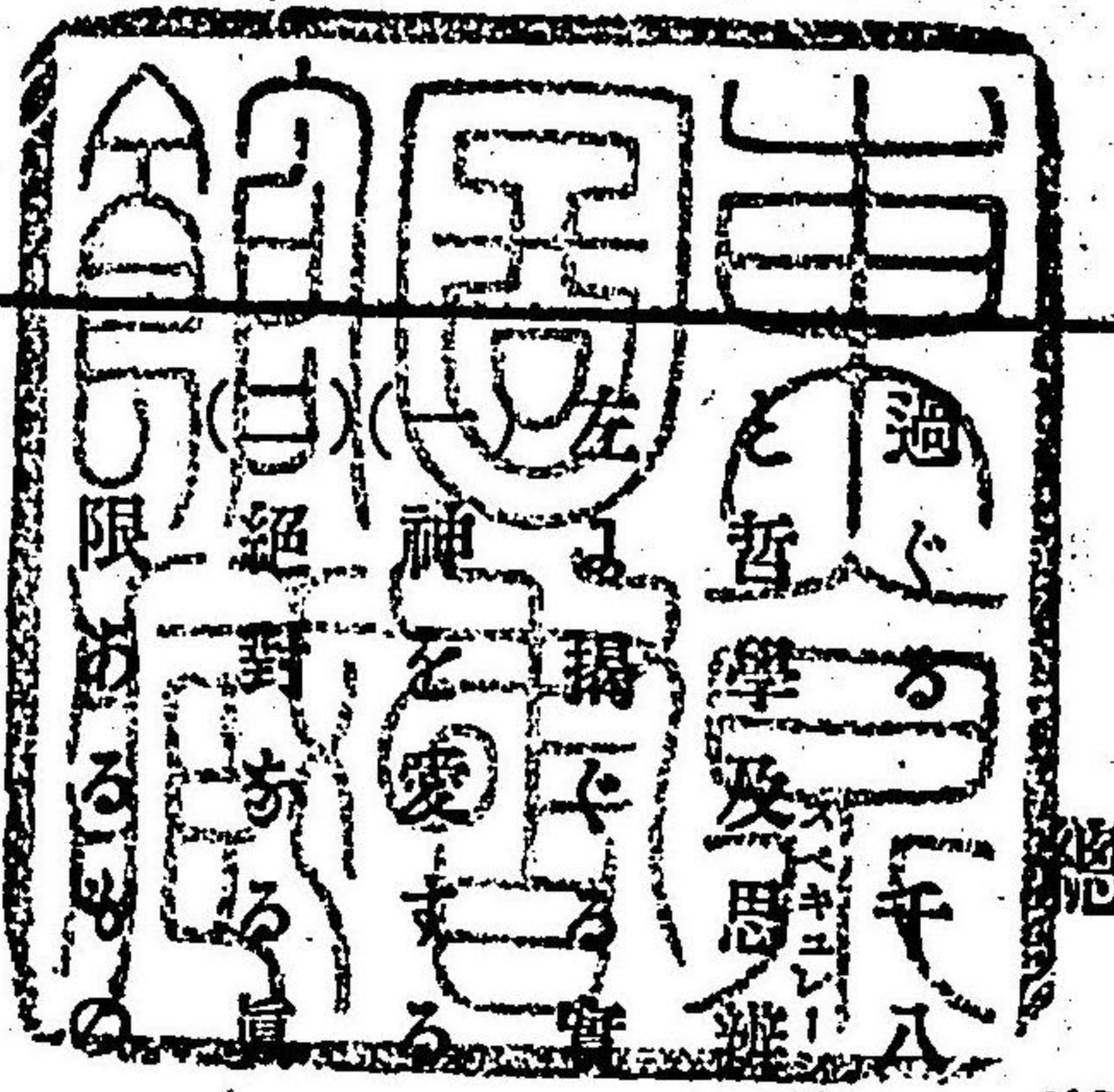
第十一項 來世論の略史……………百七十七

第三篇 第十九世紀獨逸神學畧史……………百九十三

結論……………三

基督教々理畧史

同志社教授 デビス 著



總論

百年間特に戦今百五十年間の、基督教教理歴史の諸學派を稍々普ねく研究したる結果として、實際上の數點端なく胸中より浮び來れり、如く眞理を愛すべし、理に通曉し得ると想像する勿れ、吾人の能力はにして、如何に勉むるも眞理を觀ること不完全に、加ふるに多少誤謬の混淆し居るを免れず、(三) 信仰の常に証據と比例せしめ、説の單に斬新なるか、若しくは面白さの故を以て之を受け入る、ことなく、証據の輕重

を秤りて其眞理なるや否やを定め、吾人の道德上の判断力の罪惡のためは傷害せられたること、智力上先入の偏頗を有することを認め、以て大に此點に注意すべし、

(四) 學術的にして條理明白、靜肅にして忍耐、秩序整然、前後の撞着を避くべし、セチカ曰く「時は眞理の鎖を開く」と、又或人曰く「眞理の大陽の如し時に掩蔽せらるゝことあるも是れ唯暫しのみ」と、

(五) 單に智力のみに依りて宗教上の事柄を研究するの危險なるを認めよ、吾人の神の手の業を研究する時は、又神の事を研究する時よさへも、神を忘るゝことなきよ非ず、

(六) 靈性を修養するに大に意を用ゆべし、盲者の色を見る能はず、聾者の樂を聴く能はず、心靈の耳目開かざれば深玄なる神の眞理を見又た知る能はず、

誤て手段を以て目的となす勿れ、學說と事實とを混淆する勿れ

(七) 就中最も緊要なるは聖靈吾人の靈と全く合一し、基督の約束し給へる如く吾人の生命となり、光となり、導きとあることなり(約翰傳十四章廿六節同十六章十三節を見よ)、基督教徒の生命の聖靈を働よよりて、神を顯現する生ける救主と交るよあり、靈の事の靈よよりて辨へらる(哥前二章十節を見よ)過ぐる千八百年間の神學歴史の宗教薄弱なれば神學も共に動搖することを示す、

基督教會の歴史を見れば、己れの理性をのみ據とせる人物の思辯、學說、及系統の破壊せる痕跡を彼處此處よ見るあり、吾人の避くべき二個の極端あり、第一、内なる聖靈の導と超自然を重んずるの極、終よ万有及理性を蔑視し、所謂神秘說、

敬虔説、唯心説、若しくは狂信の極に走ることなり、第二、聖靈
及超自然を蔑視するの極、終に自然説若しくは合理説に流
る、ことあり、宗教よの學術的智識よりも一層大なる價值
を有する直接實驗の智識あり、然れど實驗的智識に加ふる
に學術的智識を以てせざるべからず、

(九) 神學の眞進歩の實驗的及學術的方面の並進並擴と、聖靈と
合一することよ依りて生ずる衷心の眞活氣とに基き、又眞
誠なる方法、則ち過去の諸學説の羈絆を脱し、且其中よある
有らゆる眞理を認むることに依るものあり、

(十) 現今神學界の大潮流の漸く合理論及偽哲學を脱して、神の
眞理を信する信仰の復新、及人間を救へんとする實際上の
働を重んずるに至り、且實際を以て理論を批判し且生かし
つゝあるなり、

現今神學界に三傾向あり、

(一) 確實固定の信仰よ向ふ傾向、

(二) 不信仰の諸變態に向ふ傾向、

(三) 前二者の調和に向ふ傾向、

然れど調和の到底おし得べきものにあらす、第一を取るか第
二を取るか其一を撰ばざるべからず、

第壹篇

哲學略史

哲學の偉大なる影響を神學上と與へたるものなれば、其歴史の概略を知るは基督教神學の發達を了知するの助をなす大あり、

哲學を研究するによりて學び得らるゝ、數點及哲學と關する一般の原理數點あり、

哲學は何物をも創製するものにあらず、唯既に存在する事柄を見出すまでなり、

哲學の神に至り或は天に昇る道を開く能はず、

哲學の眞理を求め、神學の之を見出し、宗教の之を適用するものなりと云ふを得べし、

哲學の陥る一危険の唯物説に走り、唯五官の証する處のみを

八
承け入れて、神、靈、及道德上の自由を拒むこととなり、第二の危険の前の正反對に出で、唯心説に走り、神と人靈のみを以て實在者となすか、若しくは神を否定して唯人靈のみを以て實在者とし、随つて物質の存在を否定し、若しくは有心的思想者(人)を神とあすこととなり、真正の哲學の此二者即ち神と世界、物質と心靈、天と地を結合せざるべからず、

自然神教の此二者の反對を確定不動とし、凡神説の此二者を混淆す、自然神教の神を全然世界より分離し、凡神説は神即ち世界、世界即ち神ありと云ふ、凡神説にの又二個の相反せる傾向あり、一の神を世界中に没せしめ唯物説となり、一の世界を神の中に没せしめ絶対なる唯心説となる、

ソクラテス(Socrates)以前の哲學の此地球上の事を論せしものにして、彼所謂理學者と稱せしもの此世界を説明するに物質

世界より得る類推法を以てせんと企てたるものあり、テールス(Thales)大凡紀元前六百三十六年生の水を以て万物の原始とし、アナクシミチス(Anaximenes)紀元前五百四十年の空氣を以て万物の原始となし、ダイオセテス(Diogenes)紀元前四百六十年は明智或は靈魂を以て万物の原始とし、星の宇宙の呼吸器にして、濕氣の大陽より引かれ鐵の磁石に引かるゝの此呼吸の實例なりと考へたり、

次に来るは數學者にして、アナキシマンデル(Anaximander)紀元前六百十年の天地開闢の無限者の分散にして、有限物の「全」の無窮の運動若しくは發顯なりと考へたり、ピサゴラス(Pythagoras)紀元前六百十年の數を以て万物の原始とせり、石と云へば一個の石にして、一なる數を寫したるもの、則ち抽象的の一を具體的の一となしたるものなり、數の万物の原始、物質世界と其變

化及變形の原因あり、數の元素の奇と偶とよして、奇の有限なり、偶の無限なり、一即ち純一の此二者を併有するものよして奇なり又偶なりと、
次のエゾアチック學派なり、此學派中ゼノフォナス(Zenophanes紀元前六百二十年)は智能、善、よ於て無上なる一神を信せり、然れど又凡神説を奉じ、存在は唯一よして其状態を夥多にするものなりと信じたり、
パルミニデス(Parmenides紀元前五百卅六年)の五官に反對し、理性を以て有らゆる知識の源とし、又「一」の總ての存在ありとせり、
エリアのゼノー(紀元前五百年)のバルミニデスの門弟よして論辯法の開祖なり、其教ゆる處によれば、宇宙間眞實に存在するもの唯一物にして是れは夥多の外観ありと、又運動の存在を拒み唯運動の外観のみ存在すと云へり、

ヘラクリトス(Heraclitus紀元前五百〇三年)は五官を以て有らゆる知識の源となし、且眞の隠れ居るものに非ず、五官を以て識認するを得、事物の決して存在することなく常に成りつゝあるものよして、其事物の斷へざる、變せざる流動の即ち神なり一なりと、

アナキサゴラス(Anaxagoras)のペリククルス、ユーリピデス、及ソクラテスの師にして、其教ゆる處によれば、五官の事物の現象を認識するも其眞實の本質を認識する能はず、理性の五官の得たる印象を批判し之を証明すべきものあり、又「全」即ち「多」の其中は無數の變態を現す元種子を含有し、宇宙を運動せしむる勢力なる「明智」の之を混淆すと、

エンペドクルス(Empedocles紀元前四百六十年)の知識と存在との其意味よて相聯帶し、火水土氣の本原元素、愛の創造力、憎惡の

分離を來すものなりと云へり、

デモシリダス(Democritus 紀元前四百六十年)の原子説を教へたり、此原子の本來性質を有せず、互に相結合したるとき之を假有す、

次の詭辯學者あり、其中プロタゴラス(Protagoras 紀元前四百八十年)は原子と人心の反省力を拒み、思想の唯感覺にして知識の各人の獨有物、物質は各個人に見ゆる通りの物なりと云へり、詭辯説の懷疑説を實際に行ひたるものとして、眞理あるもの存在し得べからず、存在し得るもの唯説服のみと、

詭辯説のピロイ(Pyrrho 紀元前三百六十年)に始まりたる懷疑説の道を備へたり、懷疑説の要求する處の眞理の標準一もなきこと是なり、

エピキユリアン學説の懷疑説の一結果なり、此學説のエピキ

ユラス(Epicurus 紀元前三百四十二年)を以て始まり、其信條とする處の「全生涯を自己の快樂の爲に送るの人生の目的なり」と云ふにあり、此快樂の始終平等あらざるべからず、故に放逸の罪すべきものなり、又曰く死の万事を終ると、此哲學の結果の粗雑なる心意を有する者の情慾を沈湎し、精巧なる心意を有するものの精巧ある利己主義に流れたり、懷疑説の今一つの結果ハストアック學説あり、カイプラスのゼノイ(Zeno 紀元前三百六十八年)の創唱者にして「ストア」即ち詩人などの詩を誦せし廻廊に於て教をなせし故、ストアック學説の名を得たるあり、此哲學に依れば、二個の元素あり、一の根原の物質にして受動的元素あり、二の此物質より事物を形造る理性、運命、或の神として是れ能動的元素あり、該學説の實踐的倫理ハ自然の理と一致して生活せよと云ふにあり、身軀の快樂苦痛共に擯斥す

べきものなり、苦痛をも攘斥し死をも攘斥すべしと、ゼノーン九十八歳の時一日倒れて指を折り遂に自から縊れて死せり、死の万事を終るとの彼の持説にして其見解の凡神的なり、此等初代の希臘哲學者の後より來り一層着實なる哲學を教へたる人物の先驅あり、而して此後に來りし哲學者の哲學思想中には、後世の哲學の基礎となり、今日に到りて猶思慮ある人物の尊敬を博するものあり、

ソクラテス(Socrates)紀元前四百六十九年生)の内部的歸納法を發明せり、是れ恰も後世ペーコンが外部的歸納法を發明したるが如し、

ソクラテスの論究せし問題の人間と社會なり、彼の知識なるもの、性質に順ひて己を處し、學術の注入するを得ず開發せざるべからずと説き「己を知れ」實際に行へ」の二語を以て坐右

の銘となせり、

ソクラテスの時々顯われ來りて己を制御する心中の神の聲を認めたりソクラテスの詭辯論者の甚だしき懷疑の中に現われ、人々をして内に反省する處あらしめ、且道義哲學を創設せり、

プラトーン(Plato)紀元前四百三十年生)の二十歳の秋よりソクラテスの門弟とあり、師の研究法を用ひ且之を敷衍せり、又内部主觀的問答を用ひ、ソクラテスの研究法に概括と分類の二法を加へたり、

プラトーンの實験論者として、理想的の人の眞實存在し其理想者の性質を知るよあらざれば各箇人の人類に屬するや否を知るべからずと云へり、又宇宙の二個の部分に分れ、一の觀念より成り則ち天、一の物質の現象より成り則ち地なりと云へ

り、彼又論辯法ダイアレクティクス即ち論理法ロジックを用ひたり、世界の靈魂を有し、惡の其性永遠あるも此世界のみよ存在し吾人が惡を脱するの神の如き生涯を送ること、即ち眞理及觀念を永遠に考へ廻らすことよよりて之をなすを得と、又道義學中よりの情を取り去れり、

アリストートル(Aristotele)紀元前三百八十四年生は十七年間プラトイの門弟たりき、

プラトイの方法の推究なり、アリストートルの方法の論証あり、ソクラテスの定義と歸納を用ひ、プラトイの之よ分解と分類を加へ、アリストートルは歸納法と共に三段論法を用ひたり、

プラトイの哲學の根據の觀念あるものの客觀的に存在すとの説なり、アリストートルの觀念の客觀的存在を拒み、唯主觀的の存在を許容せり、彼曰く概括せる語の事物箇々の關係を顯すものにして、實際存在するもの各事物のみなりと、又曰く記憶に歸納を加へたるもの経験なり、獸畜の記憶力を有すれども歸納力を有せず故に經驗なしと、其方法の學術的なりしも一大欠點を有せり、則ち歸納論法の前提等を証明することを重んぜざりしことなり、彼又論理學を學術の本體に屬せしめたり、又曰く物質なるもの三重の形狀に於て存在す、第一、本質是れ則ち五官を以て感覺するを得るものにして有限よ且つ滅亡すべきものなり、第二、高等本質是れ則ち天賦よして不滅なり、第三、絶對性本質是れ則ち永遠性を有するものよして即ち神なり、宇宙とは唯神の心意に於ける思想あり、神の活動をなせるものあり、

プラトイの有せし原理中基督教よ類似するものあり、

- (一) 彼の哲學系統ハ有神的存在なり、神ハ唯一の智者、善の源、不變、徳性完全、宇宙の創造主又主宰ありと、
 - (二) 心靈ハ就て高尚なる見解を有せり、宇宙間ハ測るべからざる不滅の富あり、此富や人間の心靈を以て達するを得べきも、五官の範圍内に於て見出すを得ず、例せば、絶對なる美あり、絶對ある善あり、神との交通あり、是れ皆心靈を以て達するを得べきものなり、又死との善なる神ハ行くことありと、
 - (三) 靈魂不滅、來世の禍福ハ現世の善惡に基き、刑罰ハ一般ニ懲戒的あり、唯極惡の者のみ逃る、道なき地獄に送らる、
- 基督教會初代の師父ハ稍此哲學の影響を蒙れり、然れど皆基督教の遙に優れることを感せり、此哲學の神學上に及ぼしたる影響ハ左の諸點あり、

- (一) 此哲學ハ異端者を起らしめ隨て明白ある基督教々理を形造るの助をなせり、
 - (二) 思辨の傾向を養成せり、
 - (三) 稍々神學說の敘述に影響を及せり、例せば「ロゴス」說の如し、
 - (四) 最も思辨的ある師父の中プラトンの觀念を用ひたるものあり、例せばオリゼンの靈魂の生前存在の思想ハプラトニより來りしなり、
- 希臘哲學が全力を費し果したる時、新プラトニ學說アレキサンデリアニ現れ出たり、紀元前二十年、アレキサンデリアに生れたる猶太人フソイローハ其唱祖なり、其教ゆる處に依れば、吾人の神の本質を知る能はず、然れど「ロエス」に依りて幾分か神を知るを得るなりと、此哲學の基く所ハアレキサンデリア學派が希臘哲學の生出せる懷疑說の結果を避けんことを勉

めたるにあり、彼等考ふるに、神の超絶、無限、靈性よして見ゆる世界と反するものなり、故に中保者の必要ありと、又現宇宙の實跡なき形状或の模型の永遠より神の心中に存在し、神の心中の理想の世界ありき、此理想の眞實の有心者ホムレツンとなりて意識を有する創造の機關とあり、斯くて神と世界の中保となるを得ると、

此中保の神の中は含有せるものなれば眞に神性を有し、神の機關としては神に劣れるものなりと、是れ則ちフワイローの「ロエス」の教理の基礎なるが、彼の一層此説を敷衍し、思へらく「ロエス」の無心性イムホレツナレの有心者ホムレツン或の神の方の一種類なりと、則ち、
(一) 神の思想力及創造力として、
(二) 神の活動即ち理想の世界を思想中に描き且産み出す働として、

(三) 神の思想中に描きたる者即ち理想の世界として、

(四) 感覺世界を造成する原力として、

フワイローの少しも「ロエス」の化身の思想を有せず、却て身軀の万徳の大敵なりと考へたり、

フワイローの考は依れば「メシヤ」の超自然的の發現にして唯義人のみ之を見るを得、其任の散在せる猶太人をパロステナに歸らしむるにありと、

此等の「ロエス」説は多少教會師父の教義に影響を及ぼしたる處あるも「ロエス」の教理の大根源の福音史中の事實に基けるものよして異教哲學の唯眞理の片々を有するのみ、

プロテナス(Plinius 紀元後二百年生)の初めて新プラトニ學説を敷衍せり、是れ希臘哲學の結幕、諸説の撰集にして、強く東洋神ミコト秘説ヒミツに染められたるものなるも明のに宗教的の哲學なり

と稱す、去れど其實、新プラトニ學說と基督教を結び付けんと
試みたるものなり、

プロクラス(Proclus紀元後四百十二年生)の尙は弘くプラトニの
哲學及異教の奧義ミニテリスを基督教の上よ加へんとせしが功を奏せ
ざりき、彼の極端ある神秘說よ陥り自から天の默示を得たり
と稱し、加ふるに東方の神智學セソソフキ及妖術セウレヂを以てし、神より光輝を
受くること、魔術、惡靈の教などを傳へ、神の絶對的に超絶し、自
識及意志なく、萬物の上よあり、又萬物の源なりと説き、其萬物
の生せしや恰も太陽の光輝は太陽の性質の必然なる處より
生ずる如く、知識及意志に依らず神性の必然なる處より生じ
たるものありと、

萬物に流通する唯一神性の生命あり、其第一よ發して顯れた
るものハ理性にして、此理性より無意識よ且必然に流れ出づ
るものハ万有の直接なる支配者則ち世界の靈魂あり、此靈魂
より神性を有する靈魂則ち劣等なる神、惡魔、及人間なるもの
出で來る、又人の肉體を有するハ禍よして前世の罪業に基く
ものなりと、

物質世界を脱して最上の神と合一するハ人間の理想にして、
道に適ひ倫理に合する生活と思想を有するハ此理想よ達す
るの準備にして、此世の生涯にある間よても直接に幻象を見
て魂奪はる、の喜を得るを得、此世にある内よ過失あるもの
ハ再び新らしき肉體を執りて生る、かりと、新プラトニ學說
ハ異教と同盟して基督教に敵し、且隱退主義アツセチックの教義と神の超
絶説は當時の宗教思想に影響を與へたり、

「アレオバガス」の人ダイオニシアス(Dionysius)ハ第五世紀の中葉、
新プラトニ學說を採用し、彼の神秘的且神階ハイライキカルの教理ハ大に東

方教會に行われたり、神の超絶を論ずるや頗る極端にして、神の事を述ぶるの消極的よりするの外なく、且神を知るに、全く世界及自我より離れざるべからずと、此説や超絶的不可識説若しくは凡神説なり、

プロクラスよりペーコンに至る間の變轉の時代にして、哲學衰頹し、所謂學校派スコラシチズムあるものが眞理を探究し、之を奉持せんと勉めて、其功を得ざりし時代なれば、此時代に就ての喋々せざるべし、唯一言せば此學校派時代は於ては、アリストートルの哲學採用せられ、學校派の衰へたる後科學盛ふ興起し、哲學系統も眞正なるもの起り來り、プラト一の哲學系統再び重んぜらるゝに至り、且大に其形を變せしよも係らず近世哲學に及ぼしたる影響實に強大なるものあり、

ギョルダノ、ブルノー(Giordano Bruno)の紀元千五百五十年に生れ、學

校派の迷夢を打破り、身自から凡神論者として謂へらく「神の無限の明智、諸原因の原因、有ゆる生命及心意の原理なり、又大活動にして其活動は吾人の宇宙と稱するものあり」と、又曰く「神の萬有に神性を與へ、宇宙を見て自己の衣と爲し、且神性の活動の化身となす」と、彼のスピノザ、デカール、ライブニッツ、及シエーリングの先驅なり、

フランシス、ベーコン(Francis Bacon)の千五百六十一年に生れ、近世哲學の大開祖又歸納法の開祖なり、是れより先き、アルバート・マグナス(Albertus Magnus)千百九十三年(及ローシヤ、ベーコン(Roger Bacon)千二百十四年)の幾分か實驗法を用ひざりしに非ず、然れど歸納法の諸元素を悉く結合せる一組織となせしは、カール・フランシス、ベーコンを以て嚆矢となす、

デカール(Descartes)の近世哲學の父と稱せらる、彼の弘く萬物を

疑ひ、永遠なる世界の存在を疑ふて之を幻像と稱し、神の存在を疑ふて其信仰を迷信と稱せり、然れど確實にして疑ふ可らざるもの、自己の意識なり、「我考ふ故に我存す」との彼より取りて確實なる基礎にして、彼の意識を以て智識の基礎となせり」

スピノザ(Spinoza)の千六百三十二年に生れ、神の絶対なる存在或の實躰にして、宇宙間唯一の實在の則ち此神なりと云へり、スピノザの左の三點に於てデカルトと一致せり、

(一) 一切の確實の基礎の意識なり、

(二) 故に凡て明白に意識より認識せらるゝもの、の必らず眞理ならざるべからず、又明亮なる觀念の眞なる觀念にして外界の存在物を誤るゝ現はせるものあり、

(三) 故に哲學上の問題の數學的論証するを得、デカルトの數學的方法を哲學に適用するを得ると考へたれど實際之

を適用せず、スピノザの實際之を適用せり」

ホッブス(Hobbes)の千五百八十八年、生れ、経験の智識の基礎ありと云ひ、斯くて唯物説の先鋒となれり、彼の五官を以て智識を得るの唯一の基礎或の機關とせり、

ジョン・ロック(John Locke)の千六百三十二年に生る、曰く吾人の觀念は二箇の源より來る、感覺と反省是なりと、斯くて人間天賦の觀念を有することを拒めり、又曰く吾人が有する事物の觀念の實在と符合するや否を確知するに由なしと、斯くて唯心説及懷疑説の基礎を措くの助をなせり、

ライブニッツ(Leibnitz)の獨逸哲學の祖と呼ばれ、千六百四十六年に生る、アリストートル及ロックの曰く、人間の心靈の全く空にして恰も何等の記録なき紙片則ち白紙の如く、凡て此に記録せらるゝもの、の五官と經驗より來るありと、

プラトーンとライブニッツの曰く、心靈の生れながら教養の原理若くは觀念を有するものにして、外界の事物の之を喚び起し、天賦の觀念の絶對なる真理に基ける者なりと、ライブニッツの大元子論を主張せしが、抑も此元子なるもの部分なく形狀なく廣袤なく又分割し得ざる單純なる本躰あり、又形而上學的の點、勢力、生命、知覺力なり、萬物の階級の異なる之を組成する元素の異なるに非ず、同元素の發達の階級の異なるあり、凡ての元子の其本質に於ては異なることかけれども、其發達の度よ於て異なるあり、心靈の最高級に位し、此より漸次降りて終は無意識ある物質よ達するなり、元子の互は自由獨立なるも、最上の元子よよりて一致和合するなり、身躰の元子の集合躰にして、其諸元子の中樞の一元子則ち靈魂によりて交通和合するものなり、有らゆる元子の無限の智慧の意匠

を成就するため共働くものよして、萬物の神の經綸に順はせられ、今日の此現實の世界は最良の世界ありと、彼の默示の事實及眞理を承認し、理性と信仰の調和するものありと云へり、

クリスチアン、ウルフ(Christian Wolf)の千六百七十九年に生れ、ライブニッツの哲學思想を一系統となせり、然れどライブニッツと異なる點は、元子の知覺力を心靈にのみ限り、且身躰と靈魂との其本質を異にすと云ふあり、

バークレー(Berkeley)の千六百八十四年に生れ唯心論者なり、曰く吾人が見聞感味する處の者は存在す、然れど此物質の基礎の心意の觀念に過ぎず此物質の裏面は未知不可識なる實躰の存するあるにあらず、又到底斯の如きことの知り得べからずと、又曰く吾人の有する凡ての印象を造りしは無窮の心意

ある神なりと、バークレーの哲學系統の懷疑説の道を備へたり、

ヒューム(Hume)の千七百十一年に生れ懷疑哲學を敷延せり、トツク曰く有らゆる智識の経験によりて來ると、バークレー曰く知覺を離れて外界の經驗あり故に物質の虚ありと、ヒュームの此と同じ原理を心意に適用し、以爲らく心意も亦虚ありと、

ヒュームの過激ある實驗説は極端ある懷疑説を加へたり、心意あるものは印象及觀念の連続に過ぎず、此等の印象及觀念の寓すると想像する事物の唯推測にして吾人の之を証するを得ずと、ヒュームの多分物質及心意の存在の自明の者として之を信せしならん、然れど之を論証するを得ずと云へり、事物の性質

と本質の到底確實ならざるも事物其物に至りては然らずと原因結果とは常定不變の聯續の謂にして敢て相關係する處あるに非ず唯連接せるのみと、

彼の外界の存在を疑ひ、心意の存在を疑ひ、原因結果の確實なることを攻撃し、奇跡の証明し得べきことを拒みたり、然れど明智を有する宇宙の造主の存在、万物の明かなる目的、意匠、企圖あることを諾したり、

コンデヤール(Condillac)は千七百十五年に生れ純粹なる感覺説を敷延せり、

曰く吾人の有らゆる智識及性能の五官或の聳る感覺より來るものありと、然れども仮令人は發達せる性能を以て生れ來らざるも、此等の性能なるものは感覺よりて創めて生ずる者に非ず、却て生來有する萌芽より生長發達するものあり、然

るに氏の此眞理を觀過せり、之を譬ふれば樅實の樅樹にあらず、然れど其中に生長して樅樹となるものを有するあり、之と同じく嬰兒の理性を有せず、然れど發達して理性となるものを有す、之に反して猿猴の之を有せざるなり、一言以て之を云へば、彼の感覺を以て思想或の觀念を喚び起すことに混じたるなり、

ハートレー(Hartley)の千七百〇五年に生れ、外界の事物の神經及腦中より極微分子の震動を生じ、此震動の感覺の原因となるなりと教へたり、

リート(Reiz)の千七百十年に生れ、バークレー及ヒュームの唯心説を駁撃し常識哲學を創立せり、謂へらく、吾人の信仰の吾人の天性の本原直覺力に基くものにして、吾人の感覺を以て事物を知覺す、吾人が一事物に就て考ふる時、吾人の心意に直

接するもの、其事物にして觀念なるもの、非すと、彼の原因結果の理法、個人の不變なること、無窮世界の存在などの如き必然なる或の直覺的の信仰を重んせり、

スチュワート(Stewart)の千七百五十三年に生れ、其説大畧リートと符合せり、

ハミルトン(Hamilton)の千七百八十八年、有らゆる思辨的哲學に反對せり、例せば知識の確實を否む懷疑説、物質世界の存在を否む唯心説、道義世界を否む宿命説等、反對し、眞實の道義上の自由を重んせり、

プリストレー(Priestly)の千七百三十三年に生れ、人間の靈性を疑ひ、エラスマス、ダーウキン(Erasmus Darwin)は千七百三十一年に生れ人間並に神の靈性につき疑團を抱けり、

カント(Kant)の千七百二十四年に生れ、超絶的唯心説の學派に

屬し哲學上頗る力ある影響を及ぼせり、
 斯く哲學に種々の學派ありて、一派の者曰く、吾人の有ら
 ゆる智識は經驗より來り、智識の凡ての材料は感覺と之を反
 省することによりて得らると、又他の一派の者曰く、感覺の
 給する處の經驗の唯一部分にして實體、原因結果、無限等の觀
 念の人間生來有するものなりと、
 ライブニッツ曰く心意の自から智識及本能性の材料を給す
 と、
 カント曰く智識の唯一の源を有す則ち主と客との合一にし
 て有らゆる智識の經驗を以て始まると、又意識の絶對なるこ
 とを固守せり、又曰く心意と外物との共に働き、外界よりは感
 覺的印象を生じ、而して此印象の内界よりは心意の働を受く
 るなりと、

カントのロツクに反對して、吾人の外界の事物に關係なく觀
 念を有すとの説を持ち、ヒュームは反對して此等の觀念の普
 遍必然にして敵抗すべからず、然れど絶對的に眞理あるにあ
 らず唯主觀的に眞理あるまでなり、然れば事物其物に到底識
 るべからずと云へり、
 斯くてカントの哲學の懷疑説の學術的基礎とあれり、彼の説
 に隨へば吾人の唯心内の事物を知り得るのみにして、心外の
 萬物の悉く現象なるのみ、
 ヒューム曰く悟性の人を欺く故に哲學なるもの存在し
 得ずと、カント曰く悟性の人を欺くものにあらず、然れど際
 限ありて其際限の爲に哲學は存在し得ずと、ヒュームの地位
 の哲學及宗教の純全たる懷疑説に到り、カントの位地の道德
 及宗教を建つるに有限の基礎を與へたり、之を例せば經驗の

吾人に給するは前行と后行を以てす、然れど原因結果の觀念の何處より來りし乎、是れ心意の中より來りしものなり、又外界の存在す、然れど吾人の之を知るは由なし、事物其物を知ることに則ち實體學なるもの、到底出來得るものにあらず、然れど又吾人の知る處の相關的あるも矢張確實あり、意識の偽らず故は道德の確實あり眞實ありと、カントもヒュームも共に實躰學なるもの、存在し得ずと云へり、
 心意の直覺の凡て確實なる事、基く、然れど吾人は其謂所確實なる事あるものを知る能はず、譬へば神の存在の如し、吾人の信仰を基とせる道德上の確實の上、立つものなれば神の存在すること、道德上確實なることあり、
 カントの哲學系統の結果の數點を掲ぐれば左の如し
 (一) 理性の際限あり、

- (二) 智識の經驗の外は他の源を有す則ち直覺なり、而して直覺的觀念の眞實なり、
- (三) 道義の基く處の意識の眞實なることなり、來世と神の存在の信仰は意識に基くあり、
- (四) 吾人が自由性を有することを確知するは先天的に知る道義の法則に依りてあり、
- (五) 吾人が自己の不滅なることを確知するの前は同じ、道義の法則の吾人の眼前に完全なる標準を示す、然れど吾人の此世にありて決して此標準に達する能はず故は來世無かるべからず、
- (六) 吾人が神の存在を確知するも亦前に同じ、唯明智と意志を以て主宰する無上の存在者のみ道義の法則と幸福の要求する處を満足せしめ得るなり、

斯く思辯的道理は有神論中緊要なる眞理を否認する能はず
却て實際的道理の之を要求す、カントの神の吾人の上に働を
なさずとの立場に立ち、超自然的默示の存否を決するの確証
ありと云ひ、此超自然的默示の有り得ることを許せしが奇蹟
には反對し、且聖書の解釋の實際的道理に依るべく、基督の道
徳上の理想として、吾人の復生せんため自から勉めざるべか
らずと、彼の哲學の超絶的唯心説あり、

フヒヒテール(Fichte)の千七百六十二年に生れ、カントの著述の影
響を蒙ること頗る大にして、絶對主觀的唯心説の哲學系統を
敷延し、意識を以て絶對的學術(哲學)の據て以て立つべき唯一
の基礎となせり、事物の自我の外に存在す、然れど是れ自我の
一部分に外ならず、事物の唯主觀的意識の内より存在するのみ、
世界との吾人の義務の化身より外ならずと、

神との世界の道義界の謂として信仰すべきものにして推論
すべきものよあらず、神の到底吾人の智力の及ぶ處にあらず、
神の自我と存在の合一にして、之を合一せしむる連絡の愛な
り、基督の愛の化身なり、吾人が神を愛するの愛の神が自から
を愛するの愛に外ならず、吾人は神を愛する能はず、神は唯吾
人の内よりありて自からを愛するのみ、
基督の他人に卓越せるは唯彼が神と人間との本然合一の大
眞理を握りたるよりあり、贖罪は論外なり、人間の神より離る、
能はざれば贖罪の必要ありと、

シェーリング(Schelling)のヘーゲルの知己にして、エーナ大學に
於てフヒヒテールの椅子を占めたり、彼の千七百七十五年に生
れ、絶對客觀的唯心説の哲學系統を敷延し、凡神説より學術的基
礎を與へたり、フヒヒテールの哲學より於ての自我の有限にして

人間の心霊なり、シェーリングの哲學は於ての自我の絶對なり、無限なり、盡全なり、自我の非我を生ず、然れど此自我あるものの吾人の内にある普通の性にして自から働らさ且自識を有するものなり、

人間の心霊との唯無數の個々の眼よして無限なる世界の靈の之を以て自からを觀るなり、
 絶對即ち神に於ての主と客との同一よして、神の或の客觀となりて現じ、或は主觀となりて現するなり、神の人間にありて自己の意識を有するに至り、而して此人間の最も高尚なる地位よ達して理性を顯のし、此理性によりて神の自己を識るなり、シェーリングの意識を投げ棄て理性を以て哲學の機關とせり、而して此理性の無心的あり、彼の意識に代ふるに存在と知識の合一を以てせり、基督の化身の前に父の有する神性の

の潛力なりしが有心者となりて此世に顯はれたり、

ヘーゲル(Hegel)の千七百七十年に生れ、シェーリングと學窓の友よして、絶對的唯心説則ち含有的心霊の教義を敷延せり、哲學界に於て或の彼方法を發明し、或の此方法を工夫せしが歸する處皆懷疑説に陥るか或の唯心説に走れり、是に於てヘーゲルの新方法を發見し、曰く反對物の同一なることの有らゆる存在の情態なり、存在と非存在、主と客、勢力と無勢力、光と暗、是れ皆一なりと、又積極と消極との互に相容れず、積極の其反對を消極ならしむ、然れど消極の消極を消極ならしむることによりて消極とせられざるべからずと、又曰く觀念の其本源の勢力よ歸り其反對を吸取すと、余一樹を視れば此視覺の働に含める三つの者あり、樹木と其樹木の映像と其映像を認識する心意と是なり、フヒヒテは曰く存在するもの、我の

四十二

みにして、樹木と其映像の一物にして此一物の我心意の表現
ありと是れ主観的唯心説なり、シェーリングの曰く樹木も自
我も共に眞實若しくは理想の存在なり然れど是れ絶対の表
現も外ならずと、是れ客観的唯心説あり、ヘーゲルの曰く此視
覺の働に於て眞實存在するもの唯觀念或は關係の一ある
のみ、自我も樹木も此關係なるもの、而項よして、其實在する
は此關係なるものあるが爲なりと、是れ絶対的唯心説なり、
ヘーゲルの三位一體説の左の如し、父ある神の條件を有せざ
る抽象なり、子ある神の條件を有する實在よして神が己を客
観となしたるものあり、靈ある神の第一第二の合一よして則
ち一か他にありて有する意識、消極を消極したるもの則ち存
在の總躰なり、又靈との神が自己を靈として意識せしものよ
して是れ則ち神の存在の條件ありと、

神の絶へず世界を創造しつゝ、あり、語を換へて曰く、神の絶
へず活動とありつゝ、あり、絶対とは純粹ある觀念なり、万有と
の表現し且客観となりたる觀念あり、靈との觀念が己を顧み、
己を心靈、社會、或は神として見たるものなりと、此哲學系統の
唯心説は傾けり、世界の唯思想の開展したるものにして存在
と思想の同一なりと、

論理學との觀念其物を論ずる學あり、万有哲學との己を反省
せる觀念を論ずる學なり、心意哲學との万有の中は迷ひ出で
たる處より自己は歸りたる觀念を論ずる學なりと、ヘーゲル
の抱きし神の思想の凡神的存在なり、基督の有限者の絶対的變態
あり、基督の己の神と一あることを意識せり、基督の死の人間
の有限性の極を享受することによりて神の無限の愛を表現
したるものなり、基督の復活の自己は歸りたるの表號なりと、

ヘーゲルの聖書の與へたる効果を賞讃せり、然れどカントと同じく聖書中の歴史的要素を蔑視し聖書にの歴史哲學的眞理の表號を含有するとせり、

ストラウス(Strauss)、ブルソー、バウエル(Bruno Bauer)、フキール、バフ(Fearbach)の此哲學を極端なる合理論に走らしめたり、ヤコビー(Jacobi)の千七百四十三年に生れ、信仰哲學を敷衍し、直覺的信仰の確實の根據にして吾人の直接なる神の直覺を有すと、彼の黙示を蔑視せり、

シニョイエルマーヘル(Schleiermacher)の千七百六十八年に生れ、凡神説に傾き、宗教意識を重んじ、神に依頼するの情を宗教の基礎となせり、彼曰く吾人の神を見出すに、第一の自己に於てし、第二の人類に於てし、終に万有に於てせざるべからずと、又吾人の有心性の觀念及必然の觀念を有し、此等の觀念より吾人の

有する神の觀念の來るなり、靈魂の不滅との宇宙と合し且宇宙の中に預り入ることとなり、然れば吾人の思想中より自己を塗抹し去り宇宙と一にならざるべからずと、基督の一の理想的の人間と與へられたる神靈の充ち足れるものあり、聖靈の神の通常の靈にして世界にある基督教徒全軀を活かすものなり、基督教の原來靈なる生命の方あり、基督の人類の理想の模型にして、非常なる勢力を以て人心を收攬し、且各箇人の内に神にあるの生命を實現せしむるものなり、而して基督の此神の國を立つるためよ來りしかり、

シローペンハウエル(Schopenhauer)の千七百八十八年よ生れ、ハルトマン(Hartmann)の千八百四十二年に生れ、共よ無神的一元説且厭世教を説けり、シローペンハウエル曰く宇宙間唯一の實在の意志よして智力の意志の附屬物なり、一般よの意志の無意識の勢

力にして人間に於ての上りて意識となる、意識を有する意志の本質の満足を得ざる熱望即ち災禍あり、今日現在する世界の最悪の世界にして虚無に歸するの人間の目的なりと、ハルトマンの智力を意志と並立せしむ、

無意識の有らゆる存在の根據あり、智力と意志の相結合して離すべからず、人間に於ての此二者分離し意志は反對を生じ斯くて意識を生じたるなり、意識と意志との闘争の絶へざる災禍の源なり、此災禍を免かるゝの意識を有するもの則ち人類の教育大に進歩し万民擧りて絶滅を諾するの日にありと、ヘルバルト(Herbart)の千七百七十六年に生れ、カントを祖述し、且稍ライブニッツに類する處あり、フヒテール及シューリングに反對して實躰論の要求を入れたり、彼曰く経験の哲學に恰當なる材料を給す、然れど経験にの撞着せる觀念を含む、故に理性を

満足せしめず、哲學の務とする處に此撞着を解くはあり、宗教の信仰を基とし、万有は表現せる意匠の神性の智を包含す、然ども之を証明するを得ず、

ロッツェー(Lotze)の千八百十七年に生れ、ヘルバルト及ライブニッツに傾けり、

彼の哲學系統の唯心説及唯物説に對し其缺を補ふものにして、唯心説に反對するは實驗説を以てし、曰く存在と思想の同一ありとのヘーゲルの立場の成り立たずと、又曰く唯物説の事實と合せず且吾人の意識の純一なることと調和せずと、吾人の意識の純一あることの、物質からざる超感覺的本躰即ち靈魂の存在を斷定することを要求す、凡て實躰を有する存在物は靈魂或の心靈の外にあり、神の宇宙の存在は欠くべからざるものにして、万物を統一する條緒の神はあり、神の有

心者あり、且神の無限性の完全無缺の有心性を要求すと、神の自識の完全にして人間の自識の不完全なり此神の自識の宇宙の基ありと、

ユント(Comte)の千七百九十八年に生れ、^{ボジチーピスト}確實論者あり、彼の哲學系統に従へば、人間の思想は三階段を経、第一、神學的則ち事物を説明するに超自然を以てする者、第二、形而上學的則ち形而上學の實跡若しくは抽象に頼る者、第三、確實學的則ち吾人の事物の究極の根據を見出す能はず唯事物の關係及感覺を知るのみと唱ふる者は是れあり、確實説の哲學の完全に達したるものよして六個の支派を有す、則ち數學、天文學、物理學、化學、生物學、及社會學是れなり、此中最後の社會學中よの心理學を含まず唯人と社會をのみ含有す、蓋し心意の自己の作用を觀察する能はざればなりと、

神を以て公共禮拜の無上の目的とする代りに人類の總合躰を以て其目的とす、蓋し此總合躰にの過去、現在、將來の全人類を包括し、且下等動物も此よ加はり、繪畫彫刻よ於て此無上の者を表すにの、腕に一小兒を抱ける三十歳前後の婦人を以てし、又私よは誰か現存するか若しくはの死去せる婦人を崇拜せざるべからず、道德、宗教、及教育の確實派の僧侶の監督する處にして、此僧侶を總理する最上の法王のハリに住すと、ハッンス・リー氏の此哲學系統の基督教を取り去りたる羅馬教なりと稱せり、

ゼームス・ミル(James Mill)の千七百七十三年よ生れ、其子ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)の千八百六年に生れ、バイン(Bain)の千八百十八年に生れ、ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)の千八百二十年に生れ、皆左の敍點よ於て大躰の一致す、

- (一) 知識の材料の悉く感覺の給する處なり、
 (二) 必然若しくは直覺の信仰の觀念聯起の原理を以て説明せらる、之を稱して聯起學派と云ふ、
 (三) 直接なる自己の意識なるものなく、唯格別なる感情若しくは心性作用の意識あるのみ、心意の心性作用の聯續なりと斷定するの外なし、
 (四) 意志の作用も他の万事と同じく原因結果の範圍に属する者なり、之を必然説と稱す、
 ハーバート、スペンサーは感覺的哲學を加ふるに進化説を以てせり、

氏は一の本原の存在若しくは勢力が凡ての現象の後より存在することを假定せり、此本原の勢力が單純より複雑に進歩或は進化することにより万物は生じ來るなり、吾人の有ゆる必

然ある信仰の進化の産出物にして世々相傳へ漸次に形を成せしかり、蓋し道德上の勢力も此中に包括せらる、神經の信仰の前因、物質の心意の前因なり、心意の物質を據とすと、ジョン、スチュワート、ミル曰く有智なる造物主の存在を信せしむるは足る蓋然證據の存在すと、又曰く基督の歴史上の人物あり、何となれば弟子等が眼前に摸型を見ずしての今日新約書中に見る如き人物を描き能はざればなり、基督の人類の理想的代表者又嚮導者なりと、
 學術の靈魂不滅に反對する證據を給せず却て是れ人性至當の希望なりと、ミルの智あり且善ある万有の創造者を受け入る、能はず、寧ろ二元説を眞理と近しとし、又超自然の存在し得ると云へり、
 人類教との人類の幸福は自己を捧ぐるものなり、

スペンサー曰く宗教の目的の全く不可識の勢力なる知れざる神あり、人類の此神の表號を要せり、而して恐らく何時までも之を要するからん、然れど吾人の此表號の唯表號のみにして其表する實物に少しも似たる處なきものありと考へざるべからずと、

此等晩今の哲學系統が神學上に與へたる結果に就ての其影響頗る大なりと云ふも過言に非るなり、思辨的哲學の驅逐する處となり神學の中心の大原理則ち神より出づる默示を忘れたる神學者の合理説に走り、之に反して反對の極端を走り哲學及科學を蔑視したるもの、到底學術の光に立ち能はざる極端なる神秘説若しくは敬虔説に陥れり、然れば今日要する處の者の聖別せる理性及哲學、則ち聖靈が光、生命、及導きとして寓れる理性及哲學あり、斯く生命と光に充てる聖靈に照

らされ活かされて、始めて眞實の哲學と眞實の神學が一となり又離すべからざるに至るあり、斯く夥多にして且變態なる、相反目し相反對せる哲學系統を視、且此等の哲學の中間の靈魂よ其熱望する安息を與へ得るもの一もなく、又此等の哲學を總合しても尙此安息を與ふる能はざる事實を視れば、神學の必要又神學の餘地あるや明あり、又或る哲學の有心的の神に反對するも大抵の哲學の宇宙の説明をなし得るもの、唯有心的の神のみありと主張するなり、或の不可識説を唱へて吾人の知る能はずと云ひ、或の哲學の正しく絶對者を解明するものありと稱し、又此二者の中間に立ちて叫ぶものあり、曰く吾人の有する神に關する思想の道理に適ひ且少くとも信仰として保証せらる、故に吾人の有心的の神の存在し給ふこと、此神を知るの知識の、假令盡せ

るに非ざるも確實あること、を學術的且哲學的の根據に依りて假定するを得、又殆んど凡ての哲學の基督の人類の道德上の理想ありと云ふ、

カントの哲學のヨット、ブエー、シエミット(J.W.Schmid)ブレッツシユナイデル(Bretschneider)及ヒリツシユル(Rischl)の影響を與へ、ヘーゲルの第十
九世紀の前半に於て偉大なる勢力を有せしが其後衰頽し、ロツク
の哲學の英國に於て第十八世紀の神學に大なる影響を與へ、ヘーゲルの哲學の近來再び英國蘇國及米國に復興し來り、
超絶説の新英國ニューイングランドに頭を擧げ始めたり、之に反して羅馬教會の
哲學の影響を蒙ること甚だ尠し、エフ、エイチ、ヘッヂ氏「理性と宗教」
なる書中より曰く、「理性の味方とする處の又信仰の味方として
此二者互に相補ふ者なり、理性の信仰の給する榮養と刺激を
要し、信仰の理性の働に依りて明白に敷延せらるゝを要す」と、

第貳篇

教理略史

第壹項 初代教會内の異教徒の批評及異端

基督教の始めて顯ゆる、や、唯輕蔑嫌惡を蒙るのみなりしが、
第二世紀の中葉より公に之を嘲弄し之に反對を試みる者を
生ずるに至れり、第二世紀の後半より其書を公にせし希臘の識
言家ルシアン(Lucian)の基督教のことを述ぶるに反語アイロニーを以てし
且之を嘲弄せり、

同じく希臘の哲學者なるセルサス(Celsus)の第二世紀の後半に
書を著りして基督教徒を攻撃せしが、オリセン(Oriens)の八冊の
書を公にしてセルサスに答辯せり、今日吾人がセルサスと彼の
の著書に就て知る處のオリセンの答辯中に存する處のみあり、

新アラトール學派の一人ポルフェリー(Porphyrus)の第三世紀に書を著りして基督教を攻撃せしが、此書も其答辯も共に失せて跡なし、此等の基督教に與へたる攻撃の旨に是が答辯を喚起するの助をなしたるのみならず、基督教の教理及信仰を明白に叙述するの助となれり、
 加ふるに基督教を腐敗せしめ曲げて撰造せんとするものあり、隨て之を曝露打破するの必要起り來り、此必要に迫られて教會の權威も重きを置くこと過度も、遂に異端の他の極端に陥るの危険を生せり、
 初代三世紀間に行われたる異端の一群の猶太的あり、使徒時代も早や既に猶太主義を行はんとせる者あり、彼等はモーセの律法を確守すべきことを主張したり、然れど猶太的基督教が特別なる一學派を形造るに至りしは漸く第二世紀の中

葉にして、此學派を名けてエピオナイト派(Ebionite)と稱し、二派に分れ居たり、極端派のキリストの超自然的誕生を否定し、キリストの唯ヨセフとマリアの子なる人間として、再び歸り來りて此世の國を設立する者ありとし、万人の皆モーセの律法及禮拜式を守らざるべからずと主張し、且ポロの使徒の職權を否定せり、

温和派のキリストの超自然的誕生を認定し、且己れのモーセの律法を嚴守したりと雖も、万人悉く之を守らざるべからずとの主張せざりき、此極端温和の兩派ともキリスト再臨の説及キリストの地上君臨の説を奉せり、小亞細亞のセリンサス(Cerinthus)のエピオナイト説とノスタック説の元素とを結合せり、蓋し此エピオナイト派の唯一小教派に過ぎざりき、
 第二世紀の終頃特別に存在せし他の一小派ハドセター(Docete)

と稱する者あり、其説く處に曰くキリストの人跡の唯幻像若しくの妖靈にして其生と死の唯幻なりと、約翰第一書四章二節及約翰第二書七節は暗指し且攻撃せるの此種の思想なるが如し、此等の思想家の思へらく有らゆる罪惡の其根源を物質中に有す、故にキリストは全然物質と隔絶せざるべからずと、

黙示録第二章六節及十五節に其名を擧げて記せるニコライ宗との小亞細亞に行はれたる一小教派にして放逸を是認し妻を共有せり、

前述の諸教派の悉く微少なる教派に過ぎず、此迫害の時代中基督教徒の大跡の純潔なる信仰を奉せり、然れど當時一教派の頗る基督教會に影響を及ぼし、特に發達して偽基督教の一系統となり、斯くて眞の教會外は勢力を揮ひたる者あり、是れ

則ちノスタック説(Gnosticism)として、異教主義の思想を基督教に混淆して生じたるものなり、概して云はれ猶太人にして基督教徒たる者の猶太主義基督教に傾き、異邦信徒のノスタック教の思想に傾けり、

西方に於ての智力上の思辯に向ふの傾向あり、東方に於ての神秘説と罪惡の勢力を極端に感ずることの傾向あり、斯くて希臘哲學、猶太教、東方國民の宗教等、悉くノスタック教の材料を給せり、蓋し此ノスタック教なる者の第一世紀に始まりたるも廣く勢力を揮ふに至りしは第二世紀あり、

此教派の教ゆる處に依れば神の至高處に位を占め、一切の受造物の少しも神に接するを得ず、其中間に測るべからざる深淵あり、此無上の天父と物質世界の中間に横はる深淵を連絡する鎖の「イオン」と稱する靈性の實在物として、其生ずるや初

め神の屬性と勢力、有心者の形狀を以て神より出で來り、夫より第二、第三と順次に出で來りて生せしものなり、物質の罪惡の源にして神に反對す、世界の創造者なる舊約のエホバの「イオン」の下に位する實在者なり、キリストは「イオン」界中の一實在者として自から「ナザレ」のイエスと合一せり、然れど此合一や唯一時の合一に過ぎず、人間の道德上の階級も分たれ、何人も下階より上階に昇る能はずと、ノスチック派中にも夥多の分派あり、且見解を異にするもの夥しく、或は物質世界の幻像なりと云ひ、或は物質世界の惡の勢力を及ぼすの力ありと云ひ、或はエホバを惡意ある實在者となし、或は有限者にして無意識に一層高等なる勢力の意志を行ふ者となし、或は聖書を比喩的ニ解釋するもあり、或は其大部分を退くるもあり、或は此世を蔑視して隱退者となり、或は放逸無法の極に走るあり、

其様千態万狀一言に盡すべからず、此ノスチック教の終を告げたるの第五世紀頃あり、

マニキアン説(Manichaeism)の第三世紀の終頃に初まり、是れ亦異教と基督教の混淆なり、其ノスチック教と異なるハ基督教の思想を合むこと寡く却て自然説を合むこと多きと一層充分なる組織を有するの二點にあり、

モナキアン説(Monachianism)の二箇の分派を有す、一派ハセオドラス(Theodorus)及アルテモン(Artemon)に始まり、サモサタのポール(Paul)に到て其頂點に達せり、前二人の紀元二百年頃羅馬に於て罪に定められ、后者の紀元二百六十九年にアンテオケの監督職より貶さる、バトリバツシアン説(Patripassian)の紀元二百年頃羅馬に於てフラクシアス(Praxeas)の創めて唱へし處にして、サベリアス(Sabelius)に至りて其頂點に達せり、サベリアスの紀元二

百六十一年アレキサンデリアに於て破門せられたり、ポールもサベリアスも共ニ神の純一の有心性を有すと云ふの點ニ於ての一致せしも、此唯一の神性有心者の化身に關して説を異にせり、ポールのキリストの生前存在を否定し、神キリストの内にあるとの唯キリストに優れたる智慧と能力を賦與せるの謂にして、キリストが神性の品位の一種類を有するの是れが爲なりと、サベリアスの教へて曰く、キリストの本性の中心となりたるもの唯一の神性有心者にして、キリストに於ての神性の人性の衣服を假有せしものあり、三位一躰との唯表現の三一ある謂にして、概して云へば神が宇宙を創造保護するに當り外部的動力として現れたるの則ち、ロエスルなり、神が法則を與ふるものとして現れたるの則ち父なり、救済の働に於ての神の子なり、信者を聖別するの働に於ての聖靈を

り、キリストの化身てふことセオロギなく唯神の出現あるのみと、此等の異端の教會をして明確に教義を記述するに至らしめたり、されど初代の師父の決して思辯的若しく哲學的の神學者に非ず、實際的として其論述する處は重に一個人と教會に關する基督教的生活を就てなりき、
 シヤスチン、マイター(Justin Martyr)の時より辯証的論述益盛に行はるゝに至り、オリゼン(Origen)の組織神學の父と呼ばれ得るなり、

第貳項 聖書と傳説

舊約不經の書パルデスマン、ホクリフのバレスチナに於ての賞揚せられず、されどアレキサンデリアに於ての全く正反對に出たり、然しアレキサンデリアに於ても此不經の書と三十九卷の正經の書との劃

然區別を附したり、フィロ (Philo) の猶太人の聖書中決して
不經の書を引用せず、基督教徒の此を用ひたるも、アレキサン
德里ヤのクレメント (Clement) の時より此書の小部分を引用し
て聖書の引用とあしたる時に至るまでの、聖書として用ひら
れたるとなし、第二世紀の後半に於て基督教會内に此問題を
決せんと勉めたる者あり、カルデスノ監督メリト (Melito) はバ
スチナを旅行して此問題を研究し、兄弟オチシモスに書を送
り、書中舊約書の表を掲げしが其中にハ以士帖書を除くの外
今日吾人の有する舊約書全躰を包括せり、オリゼンの表より
今日吾人の有する全躰を包括し、其上に耶利米亞書中ハ耶利
米亞の書簡を加へたり、第四世紀より此方、希臘教會ハ吾人の
有する希伯來語の正經書に加ふるハ唯耶利米亞の書簡及バ
ラクの書を以てし、アレキサン德里ヤ及西方教會ハ不經の書

の或者を容れたり、初代數世紀間ハ新約全書と連帶して現れ
出たる偽作不經の書の其數夥し、マルシオン (Marcion) ハ路加傳を
作り替へて己の奇異ある説に適する様となし、其他埃及人に
依れる福音書、十二使徒に依れる福音書などあり、バシリデス
(Basilides) ハトマスに依れる福音書並にマツテアに依れる福音
書を著し、紀元百七十年頃の「ムラトリ」の正經ハ四福音書、使
徒行傳、黙示録、及殆んど總ての書簡ハ一般に用ひられたるこ
とを示し、聖書外の書に就てハペテロの黙示録なる者を含む
されど此書の弘く用ひられずと云へり、
第二世紀の後半に於てハ普及教會ハ悉く四福音書、使徒行傳、
保羅の十三書簡、約翰第壹書、彼得前書を聖書として承け容れ、
概して云へハ不經の書を承け容れざりき、
聖書の「インスピレーション」と權威とに關してハ、フィロ

の説の頗る過激にして、預言者の唯受働的の機械にして、「セア
 チュアセント」<sup>(七十
 八譯)</sup>も逐字「インスピレーション」を受けたりと
 云ひ、初代の基督教徒論者の同一の見解を保持せり、
 シュエスチン、マターの説「依れば、預言者の口より發したる
 言葉の自己の發言に非ず、彼等を感じせしめたる神の言葉の
 發言あり、預言者の琴の如し、聖靈の之を彈する杖の如しと、ア
 セナエラス (Athenagoras) 曰く神の樂器を動かす如く預言者の口
 を動かしたりと、

アイレニアス (Irenaeus) 曰く「聖書の神と神の靈に語られたる故に
 完全なり」と、アイレニアス、テルトリアン (Tertullian) アレキサンデ
 リアのクレメント、及オリゼンの新約全書にも舊約全書と同
 じく「インスピレーション」の有ることを断定せり、アイレニア
 スの四福音書を教會の四柱と稱し、シプリアン (Cyprian) の聖書の

神の滿ち足れる徳の泉なりと云へり、

アレキサンデリアのクレメントは曰く、聖書の聖書と比較し、
 解釋を定むるに、聖書の全躰の主意も最も適合したる者を
 撰ぶべしと、アイレニアスは是に反對する反論を駁撃し、オリ
 ゼンの譬喩的解釋法を過度に應用せり、

初代に於ての聖書の一般に公會に於て讀まれたるも、聖書の
 部數の許す限の私に之を讀む者もありたりき、

使徒及彼等と共に働きたる人々の生きながらへし間の、直接
 に彼等の口より語りし言葉を重せしが、異端の起りし時所謂
 使徒信條の如き簡單な信仰を書き顯はせし者顯はれ來れり
 斯の如き信條に、常々左の如き序文を附するを例とせり、「全
 世界に擴がり地の極までも擴がりたる教會の使徒より此信
 仰を受けたり」(アイレニアス集一章十節を見よ)、「此信仰の規則

の福音の初より則ち何等の古き異端も未だ起らざる先より我曹に傳へり來りし者あり」(テルトリアンの Adv. Prax. II を見よ) 或の「此信仰の規則の全く一にして動かすべからず又改むべからず」などの如し、

第二世紀の終頃、既に新約全書の一 generally 確定し、而して傳説の第二の地位を定められたり、聖書を曲解したる異端を對し時として使徒の傳説、教訓、及習慣を訴へたる師父なきにあらず、然れど第三四兩世紀に於ては傳説の頗る卑き地位を有し、大に訴ふる處ありたる者の唯聖書のみ、第二世紀の後半に於ても既に傳説の權威の聖書に劣ることを認められ、師父の傳説の價值の源泉の遠近に比例すと教へたり、

第四世紀より第七世紀に至るまで、「インスピレーション」に關し前に述べたると同一の説行はれ、聖書記者の聖靈の機關を

して其言葉の誤りなく且神聖なりと考へられ、オーゴスチン (Augustine) の舊約全書の「セプティエアセント」譯の希伯來原本と異なるの聖靈の示教に依ると考へたり、

グレゴリー、セー、グレゴリー (Gregory the Great) 謂へらく、聖靈を以て聖書の記者と考ふるの正當として、聖靈を以て充たされたる記者等が自己以上に昇り、而して自己のことを書きたるの實に自然のことなりと、エルサレムのシリル (Cyril)、アムプロウス (Ambrose)、及バシル (Basil) の此説に協賛せり、されどシエローム、クリソストム (Chrysostom) 及オーゴスチンの文牒の異なる處と、微小詳細の點に於て記述の異なる處に人間の分子あるを認めたり、素より充分なる逐字感化説を奉持せしも、記者の意識を有する聖靈の機關ありと云へり、

此時代の間にアンテオケ學派に屬するデオドロス (Diodorus)、ク

リソストム、モアシユーステアのセオドール(Theodore)、及セオド
ロット(Theodoret)の聖書の文法及歴史を研究し、斯くて其真意を
達せんことを求めたり、されど一般に盛かりしハ譬喩的解釋
法あり、ラテン及アレキサンデリアの學者ハ此を用ひたり、ア
ムプロースのヤコブの中ユキリストの預表ありと考へたり、
其理由とする處ハ是れなり、曰くヤコブの二人の妻の夫たり
しが、是れキリストが律法と恩寵の二者の夫たることを預表
するものありと、此數世紀間の聖書の凡ての基督教徒の共有
物にして、總ての基督教徒が之を読み得る様荷も信者のある
處にハ其邦語之を翻譯せり、聖書の全く充分あるものあり
と考へられ、誰も傳説を以て之を補ひ或ハ此上の默示を受く
るの必要ありとは思ひざりき、聖書は凡ての他の書籍に優り
且之と階級を異にせりと考へられたり、是れ則ちアサチシア

ス(Athanasius)、ヘルサレムのシリル、オイクスマン、プロヒセンシア
ス(Vicentius)の説なり、バシル(紀元三百七十九年死す)ハ斷言して
曰く、洗禮志願者に十字架の記號をさすこと、祈禱の時東に向
ふこと、晚餐式に特別なる祈禱の形式を用ゆること、聖油を以
て洗禮の水を祝すること、洗禮式に三度浸水すること、洗禮式
の時悪魔と其使を退くることなどの如き一般に行はるゝに
至りたる慣例ハ、皆使徒の傳説に基くものにして聖書に基け
るにあらず、されど此等の皆禮儀典式の慣例に過ぎずと、
ナシアンサスのグレゴリー(Gregory)ハ教へて曰く、聖靈ハ聖書
の内にある真理の充分なる默示を吾人に與へたりと、
異端の徒等聖書を妄用したるの故を以て、正當なる聖書解釋
ハ傳説の試験を経ざるべからずと論ずるに至り、而して傳説
の純不純を定むる三個の標準あり、則ち使徒の時代より傳ハ

り、總ての國々の教會に奉せられ、且異論を唱ふる者なく一致共同して承諾する者たらざるべからずと是あり、加ふるに大會の決議を重んずるの風益行われ來り、曰く「大會の聲の神の聲なり」と、而して大會の最初より教會内に存せし傳説は明確なる形状を與ふる者と考へられたり、中世の間はの聖書及傳説に關する見解の初代と大に其趣を異にするに至れり、譬へバダマスユスのシモンシモンの初代と同じく聖書の誤謬なきことを信ずると同時に教へて曰く「摸像の敬禮の聖書中には之を示さざるも傳説に依りて正統と認めらるゝ、ありと、西方教會に於ての理論上聖書を第一の措きしも、實際上の聖書よりも寧ろ傳説を重せり、エリゲナエリゲナ (Erigena) もトーマス、アックワイナストーマス、アックワイナス (Thomas Aquinas) も共に聖書の傳説を判する標準ありと斷言し、ボナベンチエラボナベンチエラ (Bonaventura) も亦然か云へ

り、神秘論者ジョン、ウエツセルジョン、ウエツセル (John Wessel) ウキックリッソウキックリッソ (Viellet) ハッスハッス (Huss)、及ワルデンセス派ワルデンセス派 (Waldenses) の公然且實際聖書を第一位に置けり、西方教會の曰く、傳説は使徒等の舌端より出たる言葉に基き、聖書の使徒等の筆端より出たる言葉に基くと、然れど傳説の眞否を判するに力を用ゆること頗る稀にして、若し何事にても久しき間教會を行われたる事なれば直ちに取て以て使徒の直傳となせり、教會の權威は羅馬教會組織の基礎とあり、斯くて處女マリヤの無罪懷妊と昇天及化躰説の教會の權威に依りて行はるゝに至り、隨て教會は信仰の事柄に關しての誤謬なきものと考へらるゝに至れり、疑議を判決する權威を有する者として三個の異説生じ來れり、第一法王、第二大會、第三全教會是れなり、

羅馬の監督の第一説を主張し、學校派の盛なる時代に於ての此説一般に行われ、其後第二説行へる、に至り、相争ふ法王の顯はれたる後、ユンスタンスの大會(一四一四—一四一八)に於て此説の確定せられたり、されど第十五世紀の著述家中第三説を奉せしものもありたりき、

此中世の間に聖書の俗人の手より取り去られ、ツールイスの大會(一二二九年)は於て俗人の羅匈語の詩篇を除くの外、舊新約全書を讀むことを禁せられ、一千二百三十三年と一千二百四十六年と開かれたる大會の共に法王の裁可に依りて同一の禁令を發せり、

ルーテルの宗教改革の開端に隨ふて開かれたる、ツレントの大會の舊新約全書の羅匈譯則ち「ボルゲート」譯を以て標準とし、且舊約全書中に「トビッド」書、「シュデス」書、智慧の書、「エックレシ

アスチカス」書、「バラク」書、第一第二「マツカビー」書、及「士帖書」但以理書の附加等の如き不經聖書をも含ましめたり、又教會内に傳へり來りたる傳説に聖經と同一の權威を有せしめたり、天主教の神學者ベラルミン(Bellarmine 千六百二十一年死)の傳説を分ちて三種となせり、則ち第一、神性傳説是れキリストの言葉の傳へりたるもの、第二、使徒傳説是れ使徒等の言葉の傳へりたるもの、第三、教會傳説是れ則ち羅馬教會より行はれたる傳説あり、氏曰く「何事にても神の外任命する能はざる事にして普及教會内に行はる、ことあれば是れキリスト及其使徒等より傳へり來りたること必然なり」と

ツレントの大會の教會を以て聖書の唯一の解釋者となし、一個人の自由に解釋するを禁せり、法王若くは大會の聖書解釋者なることを論ずるの證に曰く、聖書の義理不明なる故斯の

如き解釋者を要すと、

俗人の猶も聖書を讀むことを禁せられ、聖書を邦語に譯するの法王バイアス第四世の禁じたる書籍の表中に加へられ、或る羅馬の著述家の如きの聖書を普通人民の手に措くは、大に聖き物を與へずの前の眞珠を投ずるゝ等しとせり、(馬太傳七章六節)、希臘教會の傳説と聖書の權威に關する見解に就ては羅馬教會と其説を等しくせしも不經の書に低き地位を與へたり、

プロテスタント教會の不經の書を退け、其理由とする處は、第一、此書は猶太國の歴史に於て預言時代の後に書かれたるものなり、第二、此書の希伯來語を以て書かれず、第三、キリスト此書より引照せず、第四、新約全書中此書を權威ある者として引用したる事なく、第五、此書の猶太教會に於ては正經の書とし

て承け入れられず、且基督教會内の初代及後代の師父及著述家には一般に退けられたりと、此不經の書を除くの外はプロテスタント教徒は羅馬教徒と同一の書を聖書の表中に加へたり、プロテスタント教徒の舊新兩約全書の原本の翻譯に勝るとおし且傳説を退けたり、素より初代教會の證左よの重きを措きしも是れ唯聖書と符合する時のみあり、又聖書の誤らざる解釋者としては存することなしとし、且人の名々聖靈の導ふ依りて解釋をなすべきことを教へたり、彼等曰く聖書は教會を以て據となす者にあらず、教會の聖書を以て據となす者なりと、且聖靈の証を重んじ多數者の思想の証なども亦然せり、

アルミニアン派の中、エピスコピウス(Episcopius)の聖靈の允准を輕んせり、アルミニアン派の聖書に二個の標準を設けたり、第

一、記者の充分能く其事實を熟知し無知の故を以て誤ることなしと確信せしむるに足る証據、第二、記者の眞理を書かんと願ひしと確信せしむるに足る証據是れなり、第十七世紀に於ての神の聖書記者を招き給ひたる事、預言、奇蹟、眞理のため死の苦を受くるに躊躇せざりし事杯を重じて聖書の正確なることの強き証據と考へたり、アナバプチスト派及クエーカー派の今日信者の胸中にある聖靈の默示を重んじ之を聖書の上よ位せしめたり、ジエスイット派は嚴格ある「インスピレーション」説に反對し、ジャンセニスト派の又之に反對する説を有し、概して云ふと羅馬教會の説とする處の「インスピレーション」の聖書の記事を誤謬に陥らざらしむるも充分ありと、ルーテルの寛大なる「インスピレーション」説を奉じ、曰く聖書

中には人間の分子あり、然して或の些少の誤謬のあるならんと、されどルーテラン教會の嚴格なる「インスピレーション」説を奉じ、逐字感化説或の筆記説行われ、曰く聖書著述の際聖靈の己れの機關たる記者の文牀に等しき文牀を撰びて之を用ひたりと、

リフォームド教會も同じく逐字感化説を奉じ、アルミニアン派の左程嚴格ならざる説を奉じ、或の些少の誤謬あるからんと云ひ、ソシニアン派の充分嚴格なる説を奉じたれども、些細の點に於ての誤謬の存するを許せりソシナス(Socius)曰く新約全書中相撞着する點なし、或の假りに有りとするも大切なる點に於ての撞着することありと、

英國々教會のバックスマー氏(Baxter)の説は是れあり、曰く恐らくの聖書中一の誤謬も無からん、されど假令些細なる點に於

て誤謬のありとするも、是れ吾人の信仰に害を興ふる如き者にあらずと

聖書批評の一般に第十七世紀の終頃まで蔑視せられ、而して極端なる保守説の過激なる反動を喚起すの助をさせり、第十七世紀の前半に於てのロイド、ハルバート(Lord Herbert)同世紀の後半に於てのブランチ(Brant)、第十八世紀の初頃より於てのトールランド(Tolland)、シャフツベリー(Shaftsbury)、及コリンズ(Collins)、此數人の大に天賦の理性を重んじ、苟も聖書中の記事にして理性と一致せざる者は斷然棄却せざるべからずと主張し、斯くて聖書批評の道を備へたり、ホッブス(Hobbes)の君主を以て宗教上の事柄に於ける主權者となし、隨て聖書の價値を引下げ、且モゼの唯五經の一部分をのみ書きたりと斷言せり、スピノザの聖書の超自然的に生じたることを拒み、預言者の常ならざる

才能を有せりと云ひ、且舊約書中後世の作に係るもの多しと云へり、

佛國の羅馬教徒リチャード・サイモン(Richard Simon)の説に曰く、舊約文書殊に五經の後世の出版者の手に依りて變化せる處あり、されど此後世の出版者も同じく聖靈の指導の下よりありと、

降りて輒近の學説に至れば、羅馬教徒の教會の意識を重んじ、プロテスタント教徒は各個人の意識を重んぜり、英國々教會の禮典派の傳説を以て權威ある聖書解釋者となせり、

現今の逐字感化説益衰へ、聖書記者の特異の個人性を重んじ、聖書を一個の全躰則ちキリストに至りて絶頂に達したる進歩的の書として見るに至り、宗教上の信仰の事柄に關しての一般に誤謬を認められ、記者の聖靈と共に働ける者とし、

器械的感化説に反する能動感化説一般に行へ、信者の心中にある聖靈の証を重んぜり、之に反しユニテリアン教徒の聖書を他の高等ある文學の列に伍せしめたり、英國の自然神教徒の第十八世紀に現れ、其警語とする處の自然宗教是れなり、彼等曰く聖書の自然宗教と符合する限りは是れ全く無用物にして、其自然宗教と符合せざる限りは是れ偽かり無用なりと、少時の後佛國に生じたる不信仰の蓋し此説より生じたるあり、

セムレル (Semler) の獨逸合理説の父にして、インスピローシヨンを受けたる書籍の表より歴代志畧、以士喇書、尼希米亞記、以士帖書、路得記、雅歌、及他の舊約書の部分と馬可傳、腓立門書、及黙示録を退け、且曰くキリスト及使徒等の其教義を枉げて當時の思想及觀念の標準に應せしめたりと、パウラス (Paulus)、ロー

ル (Rohr)、ウエグシヤイデル (Wegscheider) の此合理説を敷衍して自然説となし、自然法を基として万物を解明せんとせり、

デ、ヴェツテ (De Vette) は審美的合理説の學派を開き、聖書を以て宗教的文學の古典となし、且聖書記者の胸中詩想と妄想の充分に働けりとなし、ストラウス (Strauss) の虛傳説を探り、バウル (Paul) の發達説を探り、現今獨逸の過激なる批評説は多く此二人を祖述せり、

新約全書に關しては、獨逸に於てさへも、キリスト及使徒等の言行を正確に記載したるものあること一般に承認せらるると云ふも不可なし、蓋し此説や獨逸の學者の殆んど皆一致する説あり、新約全書の二百年間の烈しき攻撃は打堪へ、今日の万国教會の中心に於て以前よりも一層強固に確立するなり、新約全書の受けたる攻撃と同一の攻撃は今日舊約全書に

向ひつゝ、あり、而して吾人の是れ亦新約全書と同一の結果を見るに至るべしと確信するを得るの強ち空望よあらざるべし、

第參項 神性論の略史

基督教會の初代に於ての神の超絶性を重んぜり、シヨスチン マイヌー曰く神の名を有する能はずと、セオン ヒラス (Theophilus)、アレキサンデリアの クレメント 輩も亦然か云へり、此地上の文字にして神の名を顯へずに適したるものなく、又神の遙か人間の上に位し、到底人間の理會し得る所にあらず、吾人が神に就て語り得る所の唯神の斯く斯くのものよのあらずと云ふ消極の點よ於てのみあり、又神の唯一との如何なるものか是れ亦語り得る所にあらずと、クレメント 曰く「神の一にして

一に優り且神性元子の上に位す」と、(Clement of Alex. Ped. 1. 3.)、オーグ スチン 等曰く神の何處にも在し給ふにあらず万物の神の中に存在するありと、

第四五世紀頃の神よ就て アンスロホモレティック の見解を有し、神に軀軀を附せし人もありき、されど一般に行はれたる説は超絶説なり、バシ シル 曰く神は有らゆる性質と名義の上に位するものよして吾人の神に就て知る所の唯神の世界に對して、有し給ふ關係のみ、吾人の神に就て知る所極めて妙し、且吾人の神に就て餘計よ知らんことを試むべからず、恐くは大陽と同じく吾人の眼を眩せしめん、實よ神の有らゆる性質と數量の上に位し給ふものなりと、アサチシアス 曰く吾人は神の如何なるものなるやを語る能はず、唯神の如何なるものにあらざるかを語り得るのみ、

オーゴスチン曰く神の人智に超絶するや極めて高く、「神の公義なり」と云ふことも、「神の悔改め給ふ」と云ふこと、同じく神の眞性を顯ゆす足らず、時間及空間の神は關係なく、又神の繼續なる觀念を有せずと、

神の本質は人間に隠れ居るも吾人の幾分か神に就て知る所あるなりとの説の中世紀間にも亦行はれたり、又神は何處よも全然現在し給ふと云ふ絶對的遍在説も行はれたり、トマス、アックイナス曰く神の何れの處よも働力として現在し給ひ、神の智識の過去、現在、未來を掩ひ、時間は神は關係なし」と、アックイナス又曰く神の意志の神の至善に依りて制限せらると、ドゥス、スコトス(Duns Scotus)の言の全く是の反對に出で、曰く神の意ひ給ふ所の盡く善なり蓋し神是を意ひ給ふ故なりと、

凡神學的學派の第十三世紀に起り、パリ大學の教授ピーマのアマルリック(Amauric)によりて敷延せられたり、神祕論者の中凡神説よ近きたるものもありたりき、宗教改革時代よ於て神に時間の繼續あるや否の議論をなすものあり、又神の其本質を以て遍在し給ふとの舊説に疑團を抱き、神は其本質に於ての天に在し給ひ、其勢力及感化力に於てのみ遍在し給ふとの説行はれたり、
スピノザ曰く神との人間に於ての思考し、動物に於ては感じ、植物よ於ての茂盛し、地球よ於ての無生ある宇宙其者よ外ならず、而して有らゆる意味に於て無限なる本質の宇宙間よ唯一あるのみ、而して此本質の種々なる變態を呈すと、
近時に於てマンセル(Mansel)及ハミルトンの主張して曰く、神の絶對的よ絶對よして變化制限等の神にはあり得べき者よあ

らず、されど神の意志及本然の完全性に依りて生ずる如き關係或の制限より離るゝよあらずと、又神を知るの智識は限あれども眞實ありとし、神の時間の上に位すとすれども繼續の事實の承認し、神の概して万事を豫知し給ふと云へり、

第四項 創世説の畧史

初代の教會の神の虚無より世界を創造し給へることを信せり、オリゼンの此世界の先に夥多の世界相次て存在し之に溯れば永遠の古に達すと教へたり、彼又思へらく、星辰の理性を有する存在者ありと、オーエスチンの説の創造の永遠より神の意志の中に存在し且永續せる者にして、萬物の保存も亦創造に外あらずと、

中世紀よ於てエリゲナ(Erigena 八百八十二年死)の流出説を奉

せり、其説く處よ曰く、宇宙の神より流れ出で劣等物とあり、而して再び優等者に流れ歸り、斯くて絶へざる流動をなすと、ミルトン(Milton)も亦宇宙の神より流れ出たりとの説を奉せり、近世に於てハミルトンの存在物の總計の増すを得ず又減するを得ずとの説を奉じ、曰く「創造との前よの勢力として存在したる者が後に活動として存在するよ至ることなり」、而して其「消滅との前に活動として存在せしものが後に勢力として存在するに至ることなり」と、エフ、エイチ、ヘツヂ(F. H. Hedge)曰く「創造との神が自己より出たるによりて生じたることあり」と、

教授サムエル、ハリス(Samuel Harris)曰く「創造との神の無限なる充満性の中に永遠より潛み居たる勢力が活動となりたる者なり」と、

今日の神の超絶性を認むると同時に含有説も一般に行われ、萬有との一定の規則に随ひて神の勢力を外に現はしたる者なりと、則ち(一)種々の勢力の空間及時間に関係して存在し、(二)種々の勢力の一定の法則及原理に随ひて存在し、而して此組織の吾人の思想に宇宙として顯われ、(三)有限なる心靈の此組織に關係を有すと、

第五項 罪惡説の畧史

惡しき天使の素と善良に造られたるも其最初の地位より墮落したるものありとの聖書の教義の初代の教會に行われたり、此惡しき天使の墮落せるの自由を誤用せるに基き、此天使の長たるサタンサタンの素と高尚ある地位を占めしが、高慢と嫉妬によりて墮落せりとなし、人間の最初の罪惡の自由の誤用よ

基づくとの一般に信せられたる説あり、されどアダムアダムの罪が子孫に及ぶとの説の初代の教會に行われず、只罪惡の傾向を傳播したる迄にして、幼時にして死せる嬰兒の審判を受くるものよあらずとあし、罪惡の靈魂の自由なる働よして、神の罪惡を許容せり、されど大躰を見れば神の罪惡の中より却て宇宙に善を來らしむとなせり、

第四世紀より第七世紀に至るまで、墮落の要素の自由の誤用よありとの説行われたり、希臘教會よ行われたる説は曰く、人間の腐敗せり、されど矢張自由の意志を有す、幼稚の時死せし者の罰を蒙らず、嬰兒の道德上不具なり、されど積極的の罪科を有するものにあらず、遺傳せる罪惡の結果の神との交通を截斷し、一層強くサタンサタンの攻撃に曝露され、一層強く自己の慾性の影響に曝露さるゝことありと、

羅旬教會のペロシアスの爭論の前に、全人類のアダムの中にありて墮落せりと考へたり、アムプロイス(三百九十年死)曰く「生れて唯一日を経たる者も決して罪なきものゝあらず、吾人の皆アダムの中にありてアダムと共に墮落し、アダムと共に死し、且アダムと共に「パラダイス」より退けられたり」と、

アムプロイス及ヒラリー(Hilary)の人間よの幾分か意志の能力ありとの説を奉じ、オーエスチンも亦初にこの此説を奉せしが、晩年よ至りて其持説を變じ、人間の全然能力を有せずとの説を奉ずるに至れり、

ペロシアス(Pelagius)の素ブリテンの僧侶なりしが、第五世紀の初頃羅馬に來れり、紀元四百十二年北亞弗利加に於て開かれたる會議は彼の門弟シイレヌチアス(Celestius)を破門し、パレヌチヌは於て開かれたる二回の會議のペロシアスを異端と

して退けたり、されど四百十六年より四百十八年に至る間よ、羅馬の監督のペロシアスとシイレヌチアスの二人に破門を宣告し、且之を允准すべきことを凡ての教會よ要求せり、ペロシアスの極端ある個人説を奉じ、各個人の靈魂の此世界に來るや全く獨立よして他の靈魂と何等の關係を有せず、恰もアダムの此世に來りしが如く何等の腐敗も遺傳せず、死なざる者の人の罪を犯すと犯さざるとは關係なく人間の命數よして、アダムより後裔よ傳はる惡しき結果の唯惡の例を示したる一事のみ、又人性の自然に遺傳することを否定し、意志の絶對的自由を認定し、吾人の天性徳をも惡をも有せずして生れ來り、アベルかどの實際完く神に従順にして、神の恩恵なくとも永遠の生命に達するを得と、又人の心情よ於ける聖靈の働を蔑視せり、

オーゴスチンの説のペレグリアスの説の正反對あり、ペレグリアスの過激なる個人主義を唱へ、自頼自信の念強く、天賦の能力を尊重し、万人は自己の救を得るため働かざるべからずと云へり、オーゴスチンの之に反して人類の團結主義を唱へ、自己を貶し、神の恩恵を尊重し、且人類の全く神に依頼せざるべからざることを主張せり、

ペレグリアスの宗教を働にありとなし、オーゴスチンの信仰にありとあす、オーゴスチンの教へて曰く、アダムアダムの墮落の前高尚尊貴の人物として、充分なる道徳上の自由則ち完全に善を愛し且行ふの能力を有せり、而して此神聖の地位に居るの極めて必要ありしが、是と同時に兩々相反する善惡二者を撰擇するの能力を有せり、されどアダム一時惡の誘惑に従ひて墮落し、死の直ちに彼の靈魂と肉體の上に来り、胸中に不和

生じ、情慾の靈魂に反對して起り來れり、自由の消失し、遂に神の助なくしての罪惡を犯すことを免る能はざる憐れなる有様となり果て、而して此性質や總ての人類に遺傳したりと、アウグスティヌスの無條件撰定及不可防的恩恵を信せり

半ペレグリアス説のゴールに於てシモン、カシアン (John Cassian) 四百三十二年死に始まれり、カシアンのシリヌストムの門弟なり、此説は紀元四百七十二年アルレスの會議に於て勝を奏し、同じく四百七十五年リオンに於て勝を奏せり、此學説の人間の道徳上充分なる能力を有すと云ひ或の何等の能力をも有せずと云ふ兩極端説を否定し、自由意志は變ずることなく、原罪の道徳上の不具にして全く能力なきの謂にあらず、人間の撰擇をなし若くはなさいるの力を有すと、是故に無條件撰定説を否定せり、後此説益オーゴスチン説に傾けり、紀元五百

廿九年に開きたるオレンツの大會の半ペレーシアス説よりも一層遺傳腐敗に重きを置き、且曰く人間の善行をなすの常に之に先立つ神の恩恵あるによると、されど不可防的恩恵と絶対ある預定を否定せり、グレゴリー、シー、グロート及羅旬教會屈指の人物の多數の數世紀間此説を奉せり、中世紀に於ての罪惡の善の否絶若しくは缺乏ありと一般に考へられ、其根源の肉躰にあらざして寧ろ靈魂に存すとの説行のれたり、罪との神の方より之を見れば人間の利己心若くの高慢なりと、アベラード (Abelard) 一千四百四十二年死曰く罪との神を侮慢するとなりと、トマス、アツクイナス曰く罪との妄りよ自己を愛することなりと、ドンス、スコラス曰く罪との溢りよ福祉を渴望することなりと、アンセルム曰く罪との幸福を求むるの念を制して正義を求むるの念よ服せしめざる時

よ生ずるものなりと、

スコラスチック派の學者の一般に原罪説に關してオーゴスチンと見解を同じくし、人性の腐敗し、各個人の生れながら罪ありと云へり、アンセルム曰く原罪との人生れながら正義を有せざることありと、トマス、アツクイナスの是よ神聖ならざる慾望、罪惡を欲するの貪慾、及無學則ち善の不在を加へたり、ボナベンチエラー (Bonaventura, 千二百七十四年死) 曰く惡しき慾望の原罪の結果ありと、アンセルムのアダムが直接に其後裔よ歸するとの説よ反對し、間接よ歸すとの説を奉じ、曰く嬰兒の其天性既にアダムの罪の結果を有する故罪せらるべきものなり、而して此罪の洗禮よよりてのみ洗滌し去られ、洗禮を受けずして死せる嬰兒の罪せらると、アツクイナスの人類の統一を重んじ、曰く吾人の罪を犯した

る人の一家族の一員ありと、ドンス、スコトスの意志の自己の活働の盡全ある原因たるを認めたり、アンセルムは曰く自由意志の本質の相反する二者の間に選擇を爲し得る力に非ず、却て變らざる忠實を以て正義を追求するの自由ありと、アックイナスのオイゴスナンと説を同ふし墮落は自由意志を消滅したりとなし、ベルナルド(Bernard)は自由意志を恩恵と併立せしめたり、

宗教改革時代に於ては、羅馬教會の曰く原罪は二要素あり則ち善なる性質の腐敗若くは壞類と罪科ギルト是なり、洗禮を受けざる小兒の救はるゝことなし、アダムの罪は人類の罪あり、人間の墮落の故を以て不具の身となり、神の恩恵なくして到底恢復の方に向て實際の進行をなす能はず、又其自由性の弱り果て何等の善事をもなす能はず、先に立つ神の恩恵の大切ある

も矢張幾分の天然の能力の殘留すと、宗教改革時代の終り方稍半ペローシアス説は傾く傾向有りたり、

ルーテラン派の説は人性の腐敗、原罪の罪科、及道德上の無能力を強く論じたり、ヅウヰングリー(Wincke)は原罪の中は罪科のあるを否み、カルピン(Calvin)と彼の學派に屬する者の一般に原罪中に罪科を含まし、曰く人類のアダムの中に存在し、アダムの人類の頭なり、而して吾人の腐敗せる性質と全然の無能力に於てアダムの罪の結果を有すと、

英王ゼームス第一世の時代より英國教會内にアーマニアン派の自由意志説に向ふの傾向を生じ、第十七世紀の終りに此説一般に行はれたり、アーマニアン派の二中擇一アーマニアン派の二中擇一の能力の自由性の大切ある本性なりとの説を奉じ、新たは生れたる小兒に罪科のあることを否み、單は此理由のみを以て罪に定めら

る、靈魂の一もあるなしと、彼等の又墮落せる人間の心靈上の事物に於て能力なしとの説を持せり、ツシニアン派の آدمの自己の墮落によりて自己の外誰よりも罪科を來さず、幾多の人類中或の爲めに悪しき傾向を遺傳せしものもあるならん、されど強ち全人類の此遺傳を受けたりとするの必要あり、且全人間が必然に死を免れざるに至りたるの アダムの墮落 より生じたるありと云へり、

近代に於ては デリッツシユ、(Delitzsch) バン、オーステルツ 井 (Van Oosterzee) エツナ、エム、グットウ 井 (H. M. Goodwin) 等の人間の三重性の説則ち人間の身軀、魂魄、及心靈の三者より組織せらるるとの説を持し、曰く魂魄の動物的生命の原力なり、されど人間に於ては魂魄の心靈則ち高等なる理性及道義性の原力と合一して獸畜の内よある生命の原力の性質に異なりたる性

質を受けたるなりと、近頃三重性の説の行ゆる、よ至る傾向あり、デリッツシユの心靈を人間の中よある主の光若くは神性の光と稱し、魂魄を其光の射光と稱せり、
スヴェーデンボルグ (Swedenborg) の教へて曰く 精氣の軀の吾人の此肉身の軀の中に存在すと、羅馬教會の靈魂の起原に就ての創造説を奉じ、プロテスタント 教會に於ては、ルイテラン 派の メソヂスト 派と同じく 傳殖説 を嘉納し、リフォーム 教會の創造説を奉じ、シュエリアス、ミューレル (Julius Muller) 及 エドワード、ビーチャ (Edward Beecher) の生前存在説を教へたり、共 力 説即ち創造説と傳殖説との互に相補助するとの説の マルチノ (Marlineau) ドルキル (Dorner) 及 ローテ (Rothe) の奉ずる所にして、此説は今や益々盛に行われんとす、
現時に於て罪に關する普通の説曰く、罪の有意の働に限る

者にして、積極と消極の二方面を有す、則ち私心と愛の欠亡是れなりと、ライプニッツ曰く罪との善の欠乏若くは否絶なりと、ローテール曰く罪との五官の慾なりと、ヘーゲル曰く罪惡の必用あり、敵抗の發達に必用なり、されど吾人の罪惡に打勝たざるべからずと、

第六項 キリストの身位説の略史、

初代教會の萬口同音を以て神子の生前存在説を教へたり、羅馬のクレメントは第一書簡第二十二章に於て、キリストの舊約中に聖靈に依りて語り玉ひしことを記し、且曰く「キリストは肉躰によればマビデの裔より出たり」と、イグナチアスは *Ad. Mag. VI.* 曰く「キリストの世々の前父と共にあり、而して此末の世に於て現はれ給へり」と、又ポリカール

(Polycarp) に送りたる書簡の第三章に曰く「凡ての時間の上に位し永遠にして眼見るべからず、されど吾人の爲めに眼見ゆる様になりたるもの」と、シヨスタノ、マーター、テシアン (Tatian) セオフロラス等は皆此點に於て的一致せり、アセナゴラスは父と子と靈の合一を就て語れり、されど又此合一中差別のあることを語れり、(Legat. XII) 一言よせば父と子と靈は其本質に於ての唯一なるも ^{ホルソナル} 身位上の差別あるありと、

「ロエス」に關する基督教の教理の初代より盛ま行はれ、吾人はヨハナが其福音の發端に此事を記せるを見るあり、ヨハナの「ロエス」の觀念を、フアイローより得たるに非ず、此觀念の寧ろ舊約書中に其根底を有するなり、ヨハナが此「ロエス」なる語を得たるは多分希臘哲學よりあり、されど「神の言」^{ロゴス} なる文字の舊約書中既に創造及默示の機關として用ひられたり、且箴言中

に智慧なる者に有心性を附し、其第八章に於ての智慧の永遠に神と伴なり且神の第一子なりとせり、此思想のキリスト前百年若しくは百餘年に著のされたる彼所謂ソロモンの智慧」と稱する書に於て敷衍せられ、此書中智慧の永遠出生のことを記せるあり、且創世及保存の働の此智慧に歸せらるゝなり、此書中智慧は「神の力の蒸發氣、神の榮光の發射」と稱せられ、(此書第七章及「エクロシヤスチカス」第一章及二十二章を見よ)「マルガム」(紀元第一世紀中に猶太人の造りたる舊約書の註釋)中に「神の言」の常に有心者として用ひらる、

初代教會の神子に附するに神の性質を以てし、且父と本質を一にすることを斷言せり、小亞細亞の基督教徒に就て紀元百十年にツラツァン帝に送りたるプリニー(Pliny)の書簡中に曰

く、「彼等のキリストに讚美を奏すること神に奏するが如し」と又オリセンの著のしたるセルサス辯駁書中第二章三十一節及同六十七節及四章二節より引用せるセルサスの記せし處を見よ、

初代教會より用ひたる最も古き完全なる讚美歌の神より奏するの讚美をキリストより奏すること夥しく、「聖徒の王」、「不滅の主」等の文字の其中にあり、(アレキサンデリアのクレメントの著述を見よ)、ユージェビウス(Eusebius)の教會歴史第五章二十八節に引用せる一人の初代基督教著者の曰く、「信仰ある兄弟等の初より書きたる詩あり讚美なり悉く神の言なるキリストを讚賞するに神性を顯はす文字を以てす」と、

オリセンの著書 De Prin. Praef. 及アイレニアス全書の第一卷十章一節、及テルトリアンの Ady. Praef. の第三章に引用せる最も古き

信仰の規則の、キリストに神性を附し、「我曹の主として神又教主にして王」と云へり、又キリストの「人にして神、人の子にして神の子」なりと考へられたり、キリストの萬物創造の時父に仕へたる後己を空ふして人となりたり、されど以前の位に止まれり則ち神なりと、羅馬のクレメントの第二書簡の發端に此語あり、曰く「兄弟等よ爾曹イエス、キリストに就て考ふる處を神よ就て考ふる如くするは恰當あり」と、

ポリカールの駢立比人よ送りたる書簡の第二章に曰く、「天にあり地にある萬物は彼に隨ふなり」と、且同書簡の第十二章にキリストの父と共に凡ての靈の恩惠の源なりと云へり、バルナバの書簡のキリストを呼んで全世界の主、生者死者の審判者と稱せり、(五章、及七章を見よ)イグネシアスのキリストの其

高等性よ於ての出生したるものにあらずとあし、又キリストの「肉躰に在す神」、「永遠なる言」、「我曹の神」なりとし、且「神の血」を文字を用ひたり、The Pastor of Hermas の全受造物の神の子によりて維持せらると云へり、

シヨスタン、マイターの神子と有らゆる受造物との懸隔の測るべからずと云ひ、セオフォラスの道ミストの常と神と共にあり、總ての受造物の前に生れ、萬物を造り、神より出たる神としてアダムと共に「パラダイス」に歩みたる神性の有心者なりと云へり、(二章十節及二章二十二節を見よ)アレキサンデリアのクレメントのキリストを呼んで「最も顯然たる神」と稱し、且曰く「彼が其智識に加ふる所あるとの彼に取りての不合理千万なり、蓋し彼の神なればなり」と、
アイレニアスのキリストの「万物の創立者、成形者、造作者、萬民

の救主、天と地の主宰者、測り得ざる神を測る尺度、常に父と共にありて總ての受造物の前に父の榮光を顯はしたるもの、又神としての罪の赦をなし、人としての苦を受けたるの故を以て神にして人なりと云へり、サベリアニスム説の顯はれ來りたる後のキリストの身位を一層明白に記述するに至れり、テルトリアン曰くキリストの父と本體を一にし、而して總ての光輝の源たる太陽より出づる光輝の如く、總ての流の源たる泉より流れ出づる流の如く、父と性質を同ふす、曰く神性の高下の程度を附することを許さず、曰く「父と子と聖靈の本質に於て三なるよあらず形に於て三なるあり、相合體して離すべからざる三個の有心者の中に唯一箇の本質あるのみ、子の仮令肉體を以て現はれたりとも、矢張神あるを以て自から見へざる父と等しくありと考へ、且彼の眞の神たると同時に眞

の人、全能者の子たると同時に己も全能者として、父の在まざる處なきが如く子も在まざる處なし」と、

ヒッポリタス(Hippolytus)のキリストを「萬物の上にある神」と稱し且神なる吾曹の主イエス、キリスト、「天より降り給ひし道なる神」等の文字を用ひたり、オリゼンのキリストは神の屬性を附し、曰くキリストの本體と身位に於ての永遠にして恰も光輝の光體に伴ふ如く常に父と共にあり、其誕生の常に充分にして常に永續し、彼の在さる處なく、地上よあると同時に天上にあり、神の屬性の分割すべからず、則ち智慧、善良、及道徳上の完全あり、誰も此等の屬性の他部分を有せずして唯其一部分のみを有する能はず、されど一人以上の者同時に此等の屬性を有し得るなりと、

サベリアスの埃及人にして殆んど紀元二百五十六年頃羅馬

に於て教をきせり、其説を簡單に述ぶれば左の如し、曰く神の三位一躰あり、されど是れ表現の三一にして、神の創世の期まで自己の内に安息し、次よの道として自己の外に出で、而して後に三度三個の異なりたる形態にて自己の外に出でたり、第一、最初よ法律を與ふる時、父として顯ひれ舊約時代の終よ於て絶對なる状態に歸れり、第二、キリストの化身の時、子として顯ひれ苦痛と昇天の後再び自己に歸りたり、第三、神の今日聖靈として顯ひる、而して全教會の聖別せられたる曉に、神の三度目本躰の唯一に歸り、而して限りなく絶對に唯一者として存在せんと、サベリアスの此説を解明せんため三個の勢力則ち運動、光輝、及熱を有する太陽の譬喩を用ひたり、幾許の初代師父のサベリアニズム説に反對せる所よりして、キリストに關する見解中、父に劣れる數點を加ふるに到れり、

彼等曰く子の生れたるの神性の必然より生じたりと云はんより寧ろ意志の働ありと、キリストの本質の絶對なる永遠性を斷言すると同時に、其^{ホレルナム}一身上の存在に制限を附したり、テルトリアンとノバシアン(Novatian)の此説を奉じ、オリゼンの此點に於て狐疑し、子と呼んで父の永遠なる勢力と云ひ、子の神性の本質を有す、されど本原の根據よあらず、其一身上の存在に於ての唯一、本原、絶對なる父の次に位すと、キリストの神人兩性の合一に關しては、ノスタック教徒のキリストの肉身と合一せしことを否定せり、されど第四世紀の初頃より此合一説頗る強く斷定せられたり、テルトリアン論じて曰くキリスト若し眞實の躰を有せざりしなれば其救ひの幻夢なりと、アレキサンドリアのクレメント曰くキリストの躰の感覺を有せず、其物を食ひたるの唯他人のなす所と和し

たるのみと、オリゼン曰くキリストの躰の靈なる人への榮光の躰と現われ、靈ならざる人への美のしからざる躰と現われたりと、

初代の著述家の單に「道^{ドク}肉躰と成れり」と云ひ、キリストの躰に重きを措きしが、其人間の靈魂を有することと就ての語る所頗る稀あり、第二世紀の終にテルトリアンとオリゼンのキリストの神性を有する靈魂を有せしことを教へ、此時より以後のキリストの全き人たることを明から様に教ゆるに至れり、一般に行われたる説の神人兩性の永遠に合一せりとの説は是れなり、

第四世紀に於て「アリアン」爭論激興せり、フソイローのアリアンに影響を及ぼし、而して神と世界との間の懸隔を誇大にし、神に劣れる然も神性ある、世界創造の機關たる中間物を唱へ

創めたり、第二世紀に於て子の神性あること、父と本質を一にすること、を論ずるものあり、第三世紀に於ての前にも既に述べし如く、サベリアニズム説と論戰をなすに當り、子の特別なる身位を有することに重きを措き、第四世紀の此二説を調和せざるべからざるの時期となりぬ、概して云へば兩説とも行われたりしも、或のサベリアニズムに反對せる所より、身位の殊別なることを明にせんがため、本質の唯一なることを犠牲とするものさへあり、而して第三世紀の終り方、子を劣等の地位に置くことを嘉しとするものあるに至れり、

アリアス(Arius)の此説を極端に走らしめたり、且アリアン説の現われ來りたるは、是れ正に前に多神教を奉せし多數の徒が群を成して教會に入り來りし變轉の時期にして、此等の徒に取つての神々の階級の觀念を受容る、こと頗る容易なりき、

紀元三百二十年則ち當時アレキサンデリアの教會の長老アリアスが創めて其持説を公よせし時より、紀元三百八十一年に開かれたるコンスタンチノープルの大會に至るまで、此爭論激しく行はれたり、最初よの正統派勢力を占め、次に半アリアン派、而して最後に正統派全勝を奏せり、斯く勝敗の運の變せしハ皇帝及朝廷の助け與つて力ありしなり、羅甸教會に於てハ正統説徹頭徹尾確立し、希臘教會よ於てハ嚴格なるアリアン派の一小黨派あり、ニケヤの大會よ於てハ初にハ此嚴格なるアリアン教徒の數十人ありしが、終りよ大會の信仰箇條に捺印することを拒みたるもの僅よ二人のみ、されどアリアン教徒ハ半アリアン教徒と同盟し、朝廷特に皇帝バレンスの賛成する所となり、而して半アリアン派ハ希臘教會に於てハ一時充分盛大なる一黨派となりたりき、されど有爲熱心な

る人物の多數ハ正統派中よ存せり、半アリアン派ハキリストの虛無より創造せられたることを否定し、而してキリストに永遠不變等の如き神性を附したり、されどキリストの父よ劣れりと考へ、同質 (Homousios) なる文字よ代ふるに等質 (Homoiousios) なる文字を用ひたり、則ちキリストの本質ハ父と一なるにあらず寧ろ父と等しきなりと、アンテオケ (三百四十一年) フヒリツボポリス (三百三十四年) アンテオケ (三百四十四年) サミニアム (三百五十一年) 及アンシラ (三百五十八年) の會議に於て半アリアン派ハアリアン説の特異の點を斥けたり、神子よ關するアリアン派の説を簡單に陳ぶれば左の如し、曰く神と世界の中間に位する實在者あり、世界の直接に神に接觸する價值なく、且之よ堪ゆる能はざる者ある故、神ハ世界を造るよ機關を要せり、子の眞實神にもあらず又眞實人よもあ

らず、人間の靈魂もなく、又神の本質屬性もなし、神の本然性の中一も子に歸すべきものなく、而して子の虚無より創造せられて受造物中最も高位に居る者なり、神の世界創造の前に「ロエス」を造り給へり、父の子の眼にのみ見るを得ず、且「ロエス」の充分に明晰に父を見且知る能はず、「ロエス」の神の下よある一怪物の如き者なりと、

「アリアン」教徒の自己の持説を論証するに當り、自己の論據を明述するよりも、寧ろ反對論者を攻撃するに力を用ひ、子の永遠出生の觀念を彼等の攻撃の根據となし、曰く「出生者の性質の不出生者の性質と異ならざるべからず」と、

ニケヤ信條の弘く同意を得るために作りたるものにして、其陳ぶる所温和なり、則ち左の如し、

我曹の全能の父なる、獨一の神、天と地、及見ゆるも見へざる

も有らゆる物を造り給へるものを信ず、

我曹の獨りの主、イエス、キリスト、神の生みたまへる獨子を信ず、即ち凡ての世界より先きに父より生まれ、神より出し、神、光より出し、光、眞の神より出し、眞の神、父と一躰(同質)として造られたるよ、非ず生れたるものあり、天にある者も、地にある者も、萬物の皆之よ由りて造られたり、我等人類の爲め我等の救のためよ、天より降り、肉躰を取り、人と爲り、十字架に付けられ、苦を受け、葬られ、第三日に復活り、天に昇り、而して生けるものと、死せるものとを審判かんがために、聖靈を以て再び來り給へん、

去れど彼の在まさいりしときあり、又彼の生れざりし前に彼の在まさいりき、又彼の無の中より存在するよ至れりと云ひ、若くは彼の(父と)其本躰及本性を異よし、或は造られ、或

の變化あるものなりと断定する人々あれば、聖なる公同及使徒の教會の、斯の如き人々を誼のれたるものなりと云ふ、此信條を説明するに當り、左に記する模様にて子の永遠出生に重きを置けり、曰く恰も光輝の常は光の存する處に存在する如く、子の存在の父の存在に伴ふ者なり、子の出生の神の本性の必然より生じたる者にして意志の働に基けるにあらず、此出生の常は充分にして常に奧義に、形體亦く若しくは此世に附ける感覺なし、同質則ち本體の一あること、の最も大切な點なり、此點を容れざれば基督教は地に落つるなり、父子の優劣の唯身位上の關係に存する而已、父と子の本質を同じくし、存在の模様を異なす、されど生れたる者の生める者と本質を同じくせざるべからずと、

正統派のアリアン派に與へたる駁撃の點は左の如し、

- (一) 該説の受造物を拜する故多神教と類を同じくす、
 - (二) 子の他の受造界のため造られたるものある故他の受造界より劣るなり、
 - (三) 該派の中保説の論理は合はず、則ち受造物の中保者を要す、而してアリアン教徒の曰く子の受造物ありと、故に子の中保者を要すと云はざるを得ず、斯くて一步步進めば際限なし、
 - (四) 該説の人間に與ふるに不完全なる救主を以てす、
 - (五) 該説の世界に適當なる神の默示なからしむ、
- アリアン派のキリストは理性を有する人間の靈魂あることを否めり
- アポリナリス(Apollinaris)曰くキリストの人間の身體と動物性の靈魂を取り、而して合理性の靈魂となりたる者の「ロエス」よし

て人間の意志を有せず、されど禮拜を受くべき者なりと、此説の正統派の反對を受けたり、此説に依れば人性の最も必要な部分のキリストと合一せず、故にキリストの人間の眞實の模範若しくは救主たる能はずと、

ニケヤの大會のキリストの神性を断定し、ユンスタンチノールの大會(三百八十一年)はアポリナリスを罪し、且キリストの人性を断定せり、

希臘教會の師父のキリストの人性を輕んじ、曰く大洋に於ける一滴の醋と同じくキリストの人性の其神性に遮蔽せらるると、初代の羅匈教會のキリストの人性を重んぜり、特にアンテオケ教會の其甚しきものあり、而して人たるキリストと神たるキリストの充全ある合一よりも、寧ろ此二者の間に存する親密なる關係、道德上の一致を教へたり、アレキサンデリア學

派の人性を神性の下に位せしめ、曰く人性の神性と合一して玄妙に其中に溶解せり、と、チストリアス(Nestorius)のアンテオケ學派の主張者にしてアレキサンデリアの監督シリルのアレキサンデリア學派の主張者なり、チストリアスのマリヤを神の母と云ふのんよりの寧ろキリストの母と云ふを正當とせり、エペソの大會(四百三十一年)の羅馬及シリヤの代員の來るを待たずして、チストリアスを罪に定め之を追放せり、されどシリヤの代員の別に大會を開きシリルを破門せり、エペソの信條のマリヤの神の母たるに及キリストの神人兩性を有することを断定せり、チストリアスの説に従ひし者の一宗派を形造りてペルシヤに定住し、其後裔の今日も猶存するあり、
ユイテクス(Eutyches)を長とし過激にシリルの説を奉せし者の

キリストに單一の性あるを教へ、曰くキリストに於て人間の屬性の神性も同化せられ、嚴格なる意味を以て云へば、人性も屬するもの一もキリストの中にあるなしと、

ユンスタンチノープルの議會(四百四十八年)はユイテクスを罪に定め、エペソの議會のユイテクスを嘉稱せり、是に於てか此問題を究めんため紀元四百五十一年カルセドンに大會を招集せり、此大會の採用せし信條の頗る嚴格にして、曰くキリストの神たることと關しても充全も、人たることに關しても充全に、眞實も神として眞實に人、其神性も關しての永遠の前父より生れ、其人性に關しての神の母たる乙女マリヤより生れ、神人兩性に於て知らるゝも唯一の有心者に於て充全に合一す、されど此兩性の特異の點の矢張保存すと、モノフヒサイト説(一性説)の此信條の言ふ所も反對して興り

しものにして、紀元六百八十年ユンスタンチノープルに開きたる第六大會のモノフヒサイト派の教義を排斥し、併せて調和的のモノセライト説(一意説)則ちキリストの唯一の意志若くは唯一不可分的の意志の作用を有すとの説も共に斥けられたり、

モノフヒサイト派のヤコバイト、ユフト、アピシニヤン、及アルメニヤンの諸派も分れ、マロナイト派のモノセライト派より生じ來れり、モノフヒサイト派の或者のキリストの性質の複成にして二組の性能を有すとの説を奉じたり、「ケノシス」(キリストの己を虚くなし給ひしこと)の教義の法式の未だ作られず、オーゴスチン曰く「彼己を虚くなし給ひしとき、前も有せし者を棄てたるにあらず、前に有せざりし者を有するに至りしあり」と、

ダマスコのシヨンが法式を立て、希臘教會内に行はれたるキリスト論によれば、キリストの唯一の有^{ホレ}心^ン者に於て合一せる充全ある人且充全なる神なり、されど此二者の關係を明示せず、シヨンの説に隨へばキリストの人性の自己の身位を取りたることなく、生前より存在せる「ロエス」の此身位の元素を給し、神の子の人性を假有せり、されど其身位の「ロエス」によりて供給せられ、「ロエス」の人性に穿入せるの恰も火の鏡に穿入せる如く、而して人性の神性によりて榮光を受くるに至れり、恰も火に觸れずして熱したる鏡に觸る、能はざる如く、キリストに^トある神性^ニ觸れずして其人性^ニ觸る、ことを得ずと、斯くてシヨンの人性を神性の下^ニ位せしめたり、

アダフシヨニズム(養子)説の西班牙に始まり、第八世紀の終頃盛に該國へ行はれたりしが、同世紀の終末に排斥せられ、而し

て殆んど舊廢に歸せり、アルキニオン(Aleuin)の之に反對し、該説の主張者を駁するに、該説の生來の子と養子法によりて得たる子との二人の子を立つることを以てせり、該説の教ゆる所に曰く、キリストの人性に關しては生來神の子たるにあらず、されど養子法によりて子とされり、キリストの養子の首にして、信者の養子たる小供且神の家族に屬するものなり、キリストの養子とありたるの彼の受洗の時ありと、

其後中世に於て羅甸教會の反動してダマスコのシヨンの説は傾き、キリストの人性を顧みず其神性を重視せり、是に於てか乙女マリヤを神の母として敬禮するの風起り、ビーター、ロソバードのキリストの化身に依りて以前と異かりたる者になりたること、及人間の神と成りたることを拒み、隨てキリストの人性の唯殼皮若しくは外部の包被ありと考へたり、トマ

ス、アツクイナスのキリストの靈魂の受造界ある萬物を知るとの説を奉せしも、キリストの此地球にあるの日絶對なる全智と全能を有せることを否みたり、

ルーテルのキリストの躰の遍在なることを教へ、且コンミニケシオ、イデオマナカム説、則ち神人兩性よ屬する性質の互に相傳通すとの説を教へたり、メランツツンの此説に反對し、ブレンツ(Brenz)等の此説を敷延して有らゆる神性に及ばしめ、曰くキリストの人として其懷妊の時より全智全能且遍在なりと、

チュービンゲン大學の神學者の教へて曰く、キリストの私よ有らゆる神の能力を用ひ給ひたり、されど唯公に之を用ゆることを避けたるのみと、ガイセン大學の神學者の曰く、キリストの此地上に居るの間、神の能力を用ゆることを大よ避けたりと、

りと、後者の一般に奉せらるゝ所の説なり、リフォームド(改革)派の神學者のコンミニケシオ、イデオマナカム説を斥け曰く、神の子の人となることによりて己を虚ふしたり、されど「ケノシス」(虚くすること)の神性の使用と表現を廢したるの謂にして其所有を止めたるにあらず、神性の榮光を隠したるの謂よして自己を剃ぎ棄てたるにあらずと、羅馬教會の説のリフォームド教會と大同小異なり、オシアンデル(Osander)の説によれば、人の子の理想上より云へば永遠より人なりと、シュエンクフェルト(Schwenkfeld)の説よれば、キリストの肉の神性の本躰よ變化せりと、又キリストは舊約の時代に靈躰を有し、此躰を以て人間よ顯はれたりと云ふものあり、或のキリストの人性の靈魂の生前に存在せりとの説を奉ずるものもありたり、

獨逸の合理學派のキリストの單に人性をのみ有すと云ひ、
 ニテリアン派中の正統派の人性の中にある神性を重んじ、斯
 くて此點に於てキリストを理想的人物となせり、過激派のキ
 リストの完全ある人物ならずとせり、セー、エフ、ク、ライッ
 (Clarke)氏のキリストの身位の人性なるも、親密に且完全に心中に
 寓り給ふ神と合一せりと云ひ、所謂正統派の神學者と稱する
 者の中此説に傾ける者あり、其中著名あるはライマン、アボッ
 ト氏にして其教ゆる所を略言せば、則ち神の萬人の中よりあり
 而して神は特異ある模様にてキリストの中よりありと云ふ
 あり、

晩今の獨逸學説の二三を擧げん、カントはキリストを以て
 道德上の理想なりと云ひ、フヒヒテー、ヘーゲル、シェリングの
 學説に於てはキリストは神人和合の最も高尚ある歴史上の

實現として描かれ、シユライエルマヘルはキリストを完全な
 る神、意識の超絶せる模範、神性の生命に有心性を附したる者
 となし、ストラウスはキリストを人類の理想となし、シエンケ
 ル(Schenkel)はキリストを以て罪なき人間の模範となせり、之を
 要するに獨逸神學者はキリストの人性を重んぜり、エブラ
 ト(Ehrard)ケッス(Gess)及トマシアス(Thomasius)は「ケノシス」の極端説
 を奉せり、トマシアス曰く「キリストは神性の榮光、神性の自識、
 及神性の屬性、全能、全智、及遍在性を棄て、之れが使用も之れが
 所有も共に棄却せり」と、又曰く「彼は其本性より全く人となり」
 而して漸次發達して神性に向ひ、榮光を受けたる後は全智全
 能にして神人となりたりと、
 ゲッスの説に依れば、ロエスは人間の靈魂となりて、乙女より
 出たる胎に寓り、神性有心者の一は三位一體中より消へ失せ

たりと、其説を略言せば、

- (一) 父の神性生命を子に通ずることを中止せり、
- (二) 子の父と共に聖靈の出づる源たらざるに至れり、
- (三) 子の世界を維持し且保存するの原力たらざるに至れり、
- (四) 子の再び前の榮光を取りたる後人として三位一躰の中に入れりと、

他は二重の生命を主張する者あり、曰く「ロエス」の己の榮光を虚しくしたるも、此と同時に三位一躰の中にありて保存し且活動せりと、

ドリツツシユ及マーチノー(Martineau)の「ケノシス」を重視し、ドル
チルは「ケノシス」の諸説を批評し、己は「ロエス」の人性と合一せ
しの進歩的のものありとの説を奉せり、

第七項 三位一躰説の略史

初代の著述家の三位一躰に關して聖書の儘の文字を用ひたり、則ち父と子と聖靈の世界に顯はれ且活動をなすと、イグナ
シアスの己の著書を読む者の注意を促すに、彼等が父と子と
聖靈に對して有する關係を以てせり(AD. MAG. XIII)、最初の時代より
聖靈の教會の生活及禮拜の中に認められ、最初の時代の信
條は於ての聖靈の榮光と品位は於ての父及子に伍せられた
り、

聖靈を教理的に記述するに至りしの子に關する教理的記述
より後なり、聖靈の有心性の一般は承認せられ、聖靈の思想の
順序は於ては第三番は措かれたり、オリセンの聖靈の三位一
躰の中に在する一位として、且創造されざる本躰を有する者
として、父を直接は知るの智識を有するとの説を奉せり、曰く

「父と子と聖靈の本性の外造られざるもの一もあるなし」と、彼又明白に聖靈を三箇の神性實躰の一と伍せしめたり、第四第五世紀間にのアリアン争論激しく行われしが、此事の既にキリストの身位の條項中述べたり、

第十一世紀に於てロシーニン(Roscelin)曰く、若し父と子と聖靈にして三人の天使の如く三つの者ならざりせば、父と聖靈との化身をなさざるを得ざりしかりと、斯くて三神説に陥れり」
 ボイテアのギルバート(Gilbert千百五十四年死)曰く、神性本質の神に於ける關係の、人性ある者の現實の人に於ける關係の如くよして、此本質の神に非ず、唯だ神の形態なり、則ち神をして、神たらしむる所以の者あり、此形態の父と子と聖靈と通じ、此三者をして唯一とならしむる者なりと、

アペラード(八百四年死)曰く父と子と聖靈の三者の勢力、智慧

及良善に相當すと、アンセルム(千百九年死)は源泉と流水と湖の譬喩を用ひたり、されど此等の譬喩の皆不充分ありと認められ居たり、

此三者の平等あることの前記の師父の明に斷言する所なり、又左に記する譬喩を用ひたるものあり、曰く父の自己の記臆若くの自識によりて永遠に自己を識認し、隨て永遠に自己の肖像を現し、斯くて子を生む、而して此子は神の悟性なり、愛の永遠に能生者と被生者を連絡し、而して此愛則ち意志の聖靈ありと、

セントブクトルのリチャード(Richard千百七十三年死)曰く、愛の自己の外ある目的物を要求す、父の愛の恰當充分なる目的物の三位一躰の第二位則ち子のみなり、此愛を適當に通せん、にの神性の第三位を要すと、東方教會の聖靈は唯父のみより

出づるとなし、西方教會の聖靈の父と子より出づるとなせり、
アンセルムアンセルムの奉せる説に曰く、聖靈の父の本質則ち神たる性
より出で、而して其同一の本質の子にも存する故、聖靈の必然
に子よりも出づるなりと、

宗教改革時代に一般に行はれたる説のアカチシアス信條よ
顯顯のされたるオースチンの三位一躰説なり、此説によれば
父と子と聖靈の存在、本躰、勢力、及永遠性に於て全然唯一なる
三有心者と考へられ、子の父に對するホムソナル身位上の關係は生じ出
でたる者なるも、子の本躰は生じたるにあらず、此神性本質の
自在且無限あり、隨て其無上の單純、完全、及無限の故を以て、此
本質の三有心者に共存するを得るなりと、

現時に於ての父と子と聖靈なる三重の顯現の本原且永久の
根據として、神性の中よ三重の區別の存する大事實の殆んど

一般に承認せらる、是れ蓋し聖書と哲學の必然なる處に基け
るあり、

第八項 贖罪説の攷史

贖罪に關する諸説に就ての、余の著書神學の大原理三百八十
五頁乃至四百三十三頁を見よ、

第九項 救拯説の略史

初代の師父の救拯の自由意志と神恩の共働の結果なりとの
説を奉じ、預定は人間の自由の行爲を預知し給ふ神の預知に
限られ、人の心情の自から神の光及寛容を誤用するに依りて
剛愎とあり、救拯の業に於て人間の預る處の神の爲し給ふ所
に比較すれば唯一小部分なりとし、復生の瞬時の作用あるも、

聖別の進歩的の作用ありとし、救拯を得るの大道の信仰よりとせり、

羅馬のクレメント、オリセン、及アイレニアスの「信仰よりて義とせらる」なる句を用ひ、クレメント(XXIII)曰く吾人の「己より己の智慧、悟性、敬虔、若しくは吾人の爲したる働により義とせらる、者よあらず、却て初より全能の神が依て以て万人を義とせし給ひたる信仰によりて義とせらる、あり」と、信仰の眞理を信じ且其眞理に靈魂を任すこととなり、信仰の智識の根據あり、されど此二者の間には相互の關係あり、第四世紀の初に、働を重んじ、洗禮を救拯の禮典となすの傾向あり、加ふるに苦行をせし、賑恤をなし、婚姻を廢する等のことを實行せり」オリセンの罪より救はるゝに七つの機會ありと云へり、則ち洗禮、殉教、賑施、兄弟を赦すこと、罪人の誤謬より改まること、聖

かなる愛、及深沈なる悔改是れあり、
 師父時代の終頃、殉教者を畏敬するの極、遂に彼等の祈禱を尊重するに至れり、マリヤの一生涯乙女ありしも唯聖徒中の一人よ過ぎずと思へり、テルトリアンの殉教者の勸解を過重するの非を論駁せり、キリストの贖罪の普及のオーゴスチンを除きて一般に認められたり、神と共に働くの決心をなすもの救はれ、然かせざるものは救はれずと、
 希臘教會と西方教會中の半ペロシヤス派とは、人間の神の助なくとも救拯の端緒を開き得るとの説に傾き、オーゴスチンを除けば、預定の預知に制限せらるると一般に信せられたり、セオドロットの羅馬書第九章の註釋中、自己の意志によりて自己を怒の器となしたる者の外に怒の器たる者なしと教へ、オーゴスチンの晩年に人間の神によりて復生さるゝまでは

全く助けあしと教へたり、オージェスタンの何故に一人の撰バ
 れ、一人の撰バれざるかの説明する能はざりき、撰バれたると
 撰バれざるの二者の神恩と果報を現すに必要なり、撰バれた
 る者の其數寡よして終まで堪へ忍ぶべし、撰バれざる者の滅
 亡ハ撰バれたる者の裨益のためなりと、オージェスタンの永遠
 の生命に就ては無條件撰定説アシムン、シムン、レニシムンを奉じたり、されど永遠の死滅
 よ就ては是に異なりたる撰定説を奉じ、而して預知の範圍を
 預定より廣からしめ、神はアダムの墮落を許容し、之に隨つて
 其經綸を整へたりと、
 洗禮と復生との間には親密ある關係存すとの説一般に行は
 れ、信仰の救拯よ欠くべからずとの説の普ねく奉せられたる
 も、信仰の性質を論ずること稀なりき、オージェスタンの救拯よ
 至る信仰の自捐及愛を含蓄するとなし、信仰則ち物を欲する

の心情の知識よ欠くべからずと、

オージェスタンの學派の働の功德を拒み、神の賜物の自由なる賜
 物にして報酬よあらずと、されど又表面より信條を承け容る
 るは救拯に欠くべからずとせり、憐恤、自練の働をなすことを
 勧め、且賑施の業も亦然り、命令と勸告の間に差別を措き、若し
 後者に隨へば報酬を得と、

第四世紀の終頃、聖徒の勸解を重んじ、第五世紀よハマリヤの
 勸解の最も價值ありと信せられ、マリヤの永久に乙女よして
 罪を有せずと考へられたり、オージェスタンのマリヤの實際の
 罪を有せずと教へたり、マリヤの無罪懷妊説の後世に生じた
 るなり、

ダマスユのシムンの預定の神の預知に基くと教へ、羅甸教會
 に於てのオージェスタンの説の中世紀中續きて行はれたる、曰

く神の義人を救拯に入る様預定し、且悪人の爲めに永遠の刑罰を豫定せり、されど悪人を永遠の刑罰に入る様預定せるにあらざると、セントヴヰクトルのヒューヨー(Hugo)、アムプロース、及トマス、アックイナスの無條件の撰定を教へたり、中世紀にハキリストの万人の爲めに死せりとの説に向ふ傾向ありたり、アレキサンダー、ヘールス(Alex. Hales)、ボナベンチエラー、及ダノス、スコラスの後ペレシウス説弘布するに至り、ブラットワルダイン(Bradwardine)及ウヰックリッフの之を嘆せり、義とせらるゝことの裁判上と實際上との二箇の意義を含蓄すとせられ、信仰の單に智力上の承認に止まらずとせられたり、アレキサンダー、ヘールス及トマス、アックイナスの教へて曰

く、夥多の聖徒のキリスト同じく己の必要よりも餘分に功德を積み、教會の此功德を利用して罪より生ずる此世の刑罰を消し去るを得、而して此功德の教會の財産なりと、斯くて又賑施、巡禮、及懺悔の苦行にの贖罪の價値ありとし、ピーター、ロムバード(Peter Lombard)及トマス、アックイナスの主の祈を復誦し、聖水を注ぎ、胸を打つことなどの一定の罪を消し去るの力ありと云へり、

中世紀間よの斯くもキリストよりも神恩を重んじ、靈魂の友其生命の源としてキリストを受け之を我有とするよりの、事る大なる貯の中より神恩を受くることに心を用ひ、生ける救主を後よ置き、靈魂とキリストの中間に乙女及聖徒を置けり、禮拜に三種類ありと教へたり、則ち(一)神に對し、(二)聖徒に對し(三)第一第二の中間に位する乙女よ對する是れなり、聖徒の遺

物に敬禮を表し、且之に祈禱を捧ぐることを獎勵せり、
 マリヤの永久に乙女にして且無罪なりとの説行のれ、第九世
 紀以後の乙女マリヤの昇天の説行のる、に至り、加ふるは
 ヌス、スコラスの時より無罪懷妊の説行のる、に至れり、
 ナード、セント、ヅ、クトル、のリツチャード、及アツクイナスの
 マリヤの無罪懷妊説を否定せしも、マリヤの生前は聖別せら
 れたりと教へたり、ボナベンチユラーの乙女を敬禮せしも其
 無罪懷妊を拒めり、ダヌス、スコラスの無罪懷妊の正當なるこ
 とにして且神の能力の正當なる表現なりと論じ、フランシス
 カン派の此説を祖述し、ドミニカン派の之に反對せり、近年に
 至り一千八百五十四年、法王バイアス第九世の始めて無罪
 懷妊説に關する教令を發せり、
 此時代の間、マリヤの王冠を戴ける天の女王の位は昇され、

而して神をして殆んど己の要求に従ひしむる程の勢力を有
 せしめ、詩篇に於て神に適用せる言葉をマリヤに適用するよ
 至れり、ウヰツクリップの之は反對して曰く、源泉なるキリスト
 に行くべしと、

宗教改革の後、羅馬教會の預定説と關して其見る處一定
 せず、ジャンセニスト派の徒の預定説を教へたるも、贖罪に際
 限を附したり、其他、預定説を教へたるも、夫と同時に神の充分
 なる神恩の万人に與へられ、斯くて万人の救拯を蒙ることを
 得ると教へたるものあり、羅馬教會の普通に教ゆる所を記述
 せば左の如し、(一) 或者の條件なく永遠の生命は撰べる、こと、
 (二) 時と場合に應じて救拯を得るよ充分なる神恩の万人に與
 へらる、こと、(三) 此充分なる神恩の撰べざる者の場合よ其
 其功を奏せず、(四) 責罰の、第一、神が其人を救ふの聖旨を有し給

のざること、第二、神が其人の罪を預知し給ふ處より其人を罰
 せんとの聖旨を有し給ふことと基くと、其他或人の條件なく
 永遠の生命に撰ばれ、或人の斯の如き撰みを受けざるも、神の
 誰にても救はれんと欲する者の救はるゝ、幾万人に恩恵を與
 へ給ふ故、此撰みを受けざる者の中救はれ得るものあらん、且
 多分或者の救はるゝならんと、されど羅馬教會の或人の無條
 件の撰定と反對し、永遠の生命と預定せらるゝは、其人を受け
 容るゝ恩恵を先見し給ふに基くとせり、
 ルーテルの過激なる預定説を奉じ、ルーテル教會の稍之を
 變じ、キリストの万人の爲と死せりとの説を奉じ、且撰定の其
 人の功若くの働を先見し給ふの故と非ず、却てキリストの功
 を認むる信仰を先見し給ふに基くとこの説を奉せり、されど悔
 改の單働説(唯神のみの働に基くとこの説)を奉せり、リフオーム

ト教會特にカルピンの極端なる撰定説を奉じ、生命に至る撰
 定も、死に至る撰定も、共に全く信仰と働と關係なしと、假令佛
 國のアミラウト(Amyraut)、バックスター、及アツシヤー(Usher)のキリ
 ストの万人のためと死したることを教へたるも、トルトの經
 文及ウエストミンスター信仰箇條は此説及際限贖罪説と一
 致せり、

第十七世紀に於て、シューアラ、ラフアン説、則ち憐恤と公
 義の二法にて罪人を待遇するによりて、神の榮光を發揚す
 るの、神の定命の第一の目的として、創造も、墮落も、救済も、責罰
 も、此定命を執行するの手段に外ならずとの説行はれたり、
 ツレツチン氏のインフラ、ラフアン説を述べて左の如し
 となす、

- (一) 人を創造せんとの定命あり、
- (二) 墮落と其結果を許容するの

定命、(三)或者を撰みて生命に至らしめ、他の者の死するに任さんとの定命、(四)キリストを遣はして撰ばれたる者を贖ひ且救はんとの定命、(五)確かに撰ばれたる者を招きて信仰、義、聖別、及榮光を與へんとの定命ありと、カルピンの悔改の單働説を教へ、トルドの經文及ウエストミンスター信條の、之と一致す、
 ホルランドのアルミニアン派の徒の無條件撰定の教義を却け、左に述ぶる如き教をおせり、曰く(一)キリストの己の死よよりて萬人を救の道の開かれ得る様、萬人の爲に死せり、(二)撰定及責罰の定命は、人間が賦與せられたる憐恤を如何に用ゆるかを神の預知し給ふに基く、是れ此定命の條件あり、(三)神恩は人間の救拯に欠くべからざるも、拒むべからざる者にあらず(四)救に至るの神恩の一度之を享けたる後再び之を失ふことありと是れなり、

英國々立教會のシェームス第一世の聖代までのカルピン主義なりしが、該王の在位中稍アルミニアン説に傾けり、クエーカー派の徒の神の愛と贖罪の普遍ありとの説を奉せり、ツソントの大會の義とせらるゝ事などに関し、左の如く述べたり、(一)義とせらるゝとの赦免と聖別の二者を含む、(二)義とせらるゝとの、洗禮よよりて吾人の内よ染入せる公義と愛によりて成就す、(三)信仰の義とせらるゝとに關し大切なる地位を有す、(四)義とせらるゝとの漸次に生ずるとなり、(五)善業の義を増し加ふるの手段なり、(六)善業の效果の永遠の生命なり、
 ルーテルの信仰によりて義とせらるゝとを以て警語となし羅馬教會の善業の説に反對し、義とせらるゝとよ復生と赦罪を包括せしめ、生ける救主を信じ、キリストと心懸を合一するとを重んじ、愛の信仰に隨ひ、愛の一切の善業を生ずと云へり

此問題に關するプロテスタント派の思想の大潮流の左の如し、(一)義とせらるとの罪人を許して之を恩寵に入らしむる神の業あり、聖別とは義とせらるゝを以て始まり、夫れより益進み行くなり、(二)義とせらるゝの信仰のみよるものとして働の其中は含まれず、(三)信仰の唯義とせらるゝの一機關たるまでにして、其働をあすのキリストなり、(四)信仰の一般の目當たるものは神の言葉なり、去れど特別の目當のキリストなり、(五)信仰とは盲目の承認に止まらず、其中の智識を包括するなり、

此宗教改革時代に於て、救拯アッセンジュランスの確信は就て、羅馬教會と改革者との其説を異にせり、前者の基督信徒の一般に、確信を有せずとの説を奉じ、後者の確信を有するの基督信徒の特權なりと云へり、

無罪の到底望まれ得べきものに非ずとの、第十六七世紀間通常のプロテスタント説なりき、アルミニウスアルミニウスの此點に就ての中立主義を執り、此事の困難なるも出來得るとかきと云へり、クエーカー派の徒は之を獎勵し、且吾人の實行上の罪惡を犯さざるのみならず、罪惡に陥るの恐れすらなきに至ると云へり、

今日羅馬教會の悔改の共働説を奉じ、曰く扶助を與ふるの神にして、人間の之を受け之に隨ふの自由なり、神の恩恵の拒むべからざる者よあらずと、

リフホームト教會及ルーセラン教會の無條件の復生を否定せり、去れど聖徒の耐久の説及共働説を奉せり、長老教會中の所謂舊派なる者の單働説を奉じ、且預定説及有限贖罪説を奉せり、メソヂスト派の徒は自由神恩説及普及贖罪説を奉じ、曰

く誰にても救拯を欲する者の之を得るに足る丈の充分なる神恩を與へらるゝなりと、

義とせらるゝとに關するプロテスタント派の説は是なり、曰く是れ罪人の爲^〇よ。あされたる^〇にして、罪人の中よ。あさるゝとにあらず、則ち罪の赦免是れなりと、又曰く養子とあり。繼嗣となるの義とせらるゝとに伴ふものにして、信仰の基礎、善業の其結果なりと、英國の禮典派の徒の善業を以て義とせらるゝとの根據となす、

獨逸神學者シユライエルマーヘル、エブライトなどの人の義とせらるゝてふとの中に、新しき生命を含ましむ、則ち父よよりて裁判上義とせらるゝと、吾人が生けるキリストの中に植へ付けらるゝと是れなり、

モリスの教て曰く、キリストの人類の頭なり、故にキリスト

の義とせられたる時よ人間も亦義とせられたるあり、唯人間よ必要なるの此事の意識を有するに至るとありと、ブツシュエルの義とせらるゝとの神と實效ある關係に入るとよよりて正義の者とせらるゝとなりと云へり、

マツデスト派の徒の救拯の確信を重んじ、吾人の心懸と聖靈との是れが證をなすと云ひ、カルビン派の吾人が自から神性の生命に生長すなどの意識を有するとによりてのみ確信を得るなりと云へり

ルーテル及カルビンの完成説を却け、ウエスレーの之を主唱し、マツデスト派の之を求むべしと云へり、ウエスレーの所謂完成との天使の如き完成よあらず、全心を以て神を受くると及愛に反する一切の事を脱却する是なり、所謂オベリンの完成説との全然且不斷神の法律に従順なると是れなり、

第十項 教會禮典等の諸説の畧史

諸所の教會の最初にの皆獨立なりしが、互に道德上の聯絡の勢力の存するを感せり、第二世紀の中葉、使徒の傳説を奉せる教會の大團躰の自から普及若くは公同の教會なりと考ふるに至り、且此等の公同教會の仲間に入るの必要を重んずるに至れり、然り而して此等の諸教會外の異端派の其數頗る寡少ありしも、救拯の公同教會内のみ存すとの思想の當時未だ行われず、羅馬の監督の卓越せる者なりと考へらるゝに至りしも、是れ寧ろ同等者中の第一流に位する者と見做されたるまでなり、

キリストの千年間の目に見ゆる地上君臨説のバルナバ、ヘルマス、パピアス、ジヤスチン、及アイレニアスの信奉する所なり、去れど羅馬のガイアス及オリシンの之に反對し、而して此

説の第四世紀より衰頽に傾けり、

洗禮の直接神の家に屬する者となる印證なりとの初代教會の考へし所、洗禮の過去一切の罪業の充分なる放釋を得る者なりとは第二世紀中葉以後の考なり、

洗禮の其基礎として悔改に加ふるゝ信仰と、正しき心情及目的を有せざるべからず、洗禮は靈ある生命に入るゝ全然必需の者にあらざるも、之を完からしむる所以の業ありと考へられたり、

小兒の洗禮のオリシン及シフリアンの時代より於て通常教會内より行われ而してテルトリアン及オリシンは此習慣の使徒等より傳はりたりと公言せり、去れどテルトリアンの小兒の洗禮の餘り幼き時より授けらるゝとして之に反對せり、蓋し洗禮の再度授けらるべきものにてあらざりき、

浸禮主義の徒も浸禮を實行せざりし徒も共に、此時代に己の見解の證據を見出せり、去れど、使徒の教なる遺書に記せる所を見れば、浸水の洗禮の心髓との考へられざりし者の如し、

化躰の教義の初代の教會の奉せざる所、麴麩と葡萄酒の神よ捧ぐる感謝祭にして、贖罪の意味を有する者にあらずと考へられたり、シリアンの之をキリストの犠牲の表號と稱し、アレキサンデリアのクレメントの「教會の唯一の犠牲の香の如く聖なる靈魂より發する言葉なり、正しき靈魂の祭壇なり、而して此靈魂の祈禱を捧げ、此祈禱の靈魂より昇り上る薫香なり」と云へり、

第四世紀以降、教會外の救拯の否定せられ、北亞弗利加のドナテスト派の徒は嚴格なる懲戒説を主張し、曰く若し信者たる

價値なき會員よして教會に輻輳し來るあれば其教會のキリストの躰より離れ、一切の禮典の空なりと、オイゴスチンも亦嚴格なる懲戒を主張せしが、ドナテスト派の論結を否定せり

オイゴスチン曰く「時として稗子の小麥と共に生ずるは是れ亦止むを得ざる所なり」と、教會の眞偽の標準の其教會が使徒の設立に掛り、且萬國に弘布せる教會の仲間に屬するや否やにありと考へられたり、

アンガス、レオ、ゼー、クレイト及クレゴリー、ゼー、クレイトの皆自から眞の教會より分離する者は滅亡に至るとの説を奉じ

オイゴスチンの公同教會より禮典を受くる能はざる時、他人より之を受くる者の救はるべしとの説を奉せり、

オイゴスチンの時代に、大會の教會の教義に關し權威ある明文を發し、羅馬の監督の同等者中の第一位を有する首要ある

教長ありと考へられたるも、全教會の上は憲法的の主權を有せざりき、第六大會(紀元六百八十年)の法王ホノリアス第一世がモノセライト(一意説)の異端を奉せし故を以て之を呪詛破門し、第八大會(紀元八百六十九年)も之を是認し、而して爾後幾多の法王の之を批准せり、茲を以て法王無謬の教理の未だ存在せざるあり

此第二時代間、禮典の目に見ゆる儀式、聖なる奧義、秘密なる神恩の中保と考へられ、注膏、祭司の聖別、寺院生活に身を捧ずる事、婚姻等の如き者も亦禮典と認めらるゝに至れり、去れど洗禮と晚餐禮の他の禮典の上に位せられたり、

大人受洗の場合に、身自から悔改と信仰を有するとの必需なる條件なり、小兒の場合には、教父の悔改と信仰の必需なる條件なりと考へられ、洗禮の原罪と實在の罪とを係らず、一切

の罪科の除去を充分ならしめ、且心中に光輝を受け、更新を得しむる者と考へられたり、受洗及眞教會への入會の救拯の必需なる條件として、是が例外たる者の殉教者なり、オーストリアの洗禮を受けざる小兒の救はれずとの説を奉じ、ペレシアスナシアンザスのクレヨリー、及ニツサのクレヨリーの是が反對説を懐けり、

此第二時代間、晚餐式の大に重んぜられたるも、化躰説の未だ法式より形造られず、麵麴及葡萄酒の祭司が之を捧げたる後にも、唯表號より過ぎずと考へられたり、

東方教會の西方教會より分離したるの、羅馬の監督より權勢を握るの便宜を興へたり、第十一世紀の終頃、法王クレヨリー第七世の大躰法王の主權を確立し、降りて第十三世紀に至り、法王の主權の絶項に達せり、其包括する所の、

(一) 目に見ゆる組織躰たる教會の地上よある神の國と同一なり、
 (二) 教會の使徒彼得の遺業として、羅馬の監督の其繼續者なり故に救拯の教會に順ふ教會内の人よ限らる、去れど不正なる破門の天國より人々を排斥せず、
 と是れなり、

羅馬の監督の使徒彼得の繼續者、地上よあるキリストの代理者とせられ、グレゴリー第七世の法王を大陽に、地上の君王を大陰よ譬へたり、法王ボニフヘース第八世の宣告して曰く、「羅馬法王に従ふの、有らゆる人間に執りて、救拯よ缺くべからざる條件なり」と布告し、明言し、確言し、宣告す」と、第七世紀よピロトの曰く、キリストが己の教會を建つる礎とあし給へる岩は彼ペテロが表白したるキリストありと、(馬太傳第十六章十八

節を見よ)、第九世紀にラドバードも同様の言を發し、而してペテロを教會の基礎とする解釋を斥けたり、アベラード、トマス、アックサナス、ボナベントチエラ、及ダノス、スコタスは法王と説を同ふし、宗教改革の時よ至り、此説を變せんとの傾向あり、ハスの自己の教義中大よ之を變じ、ウヰツクリフの全く之を排斥せり、

羅馬教會の禮典の目に見へざる神恩の目よ見ゆる徴表ありと考へ、トマス、アックサナスの神恩は目に見ゆる禮典の内よ寓すとなし、ダノス、スコタス及デウランダスの禮典の神が依て以て恩恵を與ふる手段を給する者とあせり、去れど後の世よ至り、禮典の與ふる神恩を受くるの、志願者の心靈上の熱心若くは之を執行する祭司の品性に關係を有せず、唯受典者に取りに必要なるもの、反對するとなき、單に受働的に之を受く

るとなりとの説益を行はれたり、去れど禮典を執行する間に之を嘲弄する祭司の禮典の力を消し去ると考へられたり、ダマスユスのシモンの唯二個の禮典に就て語り、第八第九兩世紀の羅匈著述家の三個若くは四個に就て語り、ビーター、ロソバードの其數を七個と定めたり、則ち洗禮、堅信禮、晚餐禮、懺悔、終注禮、聖職、及結婚是れなり、法王ユーゼニアス第四世の一千四百三十一年乃至三十七年に之を批准せり、大人に於ては、信仰則ち一般の信心の慣習、若くは反對心の無きとの、洗禮に必需なりとせられ、洗禮の通常三位一躰の名にて執行せられたり、去れど形式の首要の點に非ず、トマス、アックサスの寧ろ浸洗を可とせしも、潑水若くは注水も亦正當ありと云へり、死期切迫し、祭司の其場に居らざる時の俗人も授洗するを得たり、

洗禮の效果は、原罪と實在の罪とは關らず、一切の以前の罪の赦免を來し、且人性の腐敗を變ずると、則ち復生を得せしむるにありと考へたる者あり、去れど之は反して復生は洗禮の前より生ずる者なりとの説を奉ずる者もありたり、洗禮を受くることを切望しながら、遂に受くる能はざる者は救はれ、受洗せざる小兒の刑罰を受くるも、其罰や輕しと考へられたり、ゲルソソ、ピエル、パリのウヰリアム、及カシエタンの之と説を異にし、受洗せざる小兒も救はれ得るならんとの説を嘉納せり、洗禮、堅信禮、及聖職の三禮典の再度之を受くるを得ざる者と考へられたり、堅信禮の父と子と聖靈の名よりて、十字架の記號をなし、橄欖油とバルサム油とを以て造りたる聖油を注ぐとよりて執行せられたり、

晚餐禮に就て東方教會の説區々に分離せり、コンスタンチノ
 ーブルの大會(紀元七百五十四年)の麵麩及葡萄酒の唯キリス
 トの躰と血の表號なりとせり、去れどニケヤの大會(紀元七百
 八十七年)の麵麩と葡萄酒の之を神に捧ぐるをよより、表號た
 る者變じてキリストの眞の躰及血となるなりと云へり、羅馬
 教會に於てハトバースの第九世紀に充全化躰説を教へ
 たるも、ラトラムナス、エリゲナなどの之を反對し、概して云は
 ば第九世紀中の多數者は之に反對せり、去れど第十一世紀よ
 至りてハ、大に趣を異にし、多數者の之を嘉するに至れり、一
 千二百十五年に第四ラテラン大會の法王インノーセント第三
 世の下に此説を調印せり、ウヰックリフの此説の最大誤謬の
 一なりとして之に反對せり、
 羅馬教會の教へて曰く、キリストの弟子等の眼前に坐せし時、

彼等も食のしむるため、自己の躰と血を與へ、己の己の躰と血
 を喰ひたり、且キリストの躰ハ此禮典を執行する一切の場所
 に於て、完全な且麵麩の各分子に於て完全なりと、
 此教理より犧牲の教義生まれ出で、麵麩の再び吾人の爲に犧
 牲となしたるキリストの躰となり、マス」の交誼友情の筵より
 は寧ろ犧牲の祭壇とされり、而して其功德の鍊獄にある死せ
 る聖徒にまで及ぶなりと、

第十二世紀以降、小兒をして此禮典に預らしめず、且葡萄酒の
 溢れ失ふを恐れ、俗人に葡萄酒の杯を與へざる習慣始まり來
 り、コンスタンスの大會(千四百十五年)の之を批准せり、去れど
 是れ古代の慣習を革むる者ありと公言せり、
 初代教會の心中の悔改の赦罪の要件なりとして之を重んぜ
 しが、後の代に至り、祭司の祈禱を重んずるの風、及如何なる懺

悔若くは賠償をなすの適當なるかに就き其勸告を得るため、祭司に罪の表白をなすの風行はるゝに、至れり、第十二世紀頃の思想は依れば、赦罪は必需なるもの三個あり、則ち心情的痛歎、口の表白、及善業の償贖是れなり、紀元一千二十二年に於てウガームスの大會の金子を以て、懺悔に代ふるを許容せり、終注禮を行ふに當り、此禮をして其効果を現さしめんために、祭司の臨終の期に際せる人の目、耳、鼻、唇、手、足、及腰の七ヶ所に聖別せる油を注がざるべからず、斯くせば赦さるべき罪は一切消し去らるゝなりとの、ボナベンチナラーの教へし所なり、ピータリ、ロンバートの七個の聖職を擧げたり、則ち門番、朗讀者、逐鬼者、豫備僧、執事、上執事、及祭司是れなり、羅馬教會の不婚の純潔の結婚に勝るとの説を奉せしも、矢張結婚を以て一禮典となせり、去れど夥多の人士の此禮典を以て他の禮典よ

りの價値の劣れる者となせり、

宗教改革の羅馬教會の外観にの差したる變化を與へず、法王を以て頭となせる僧階の前は異なることなく、教會の會員となるの救拯に欠くべからず、教會と國家の同一物として、教會は人間の肉躰上に充分なる勢力を有し、之を政治上の有權者の手に渡して罰せしむるを得、且燒殺の刑の異端者に対する適當なる處置なりと考へたり、ツレントの大會の後、法王至尊説則ち法王の權力を尊大にするの傾向あり、ベライミンの全教會の大會の制裁を以て異端者たる法王を貶するを得、去れど教會の有する權力の唯此一事は過ぎず、而して是れとても唯革命的舉動に依りてなし得るのみとの説を奉じ、且氏は法王無謬の教理の出で來ることを預じめ推知せり、
プロテスマント派の思想によれば、教會の聖徒の集合躰よし

て、其内に福音の正當な教へられ、禮典の正當に執行せらる、該派の見ゆる教會を大に重んぜしむ、見ゆる教會の外にある信徒の數の極めて寡少ありとの説を奉せり、宗教上の自由の一時に與へられたる者にあらず、ルーテルの誤謬の教義を奉ずる者を死に處するに反對し、ツヰングリイの極端なる場合に於て之を可とし、カルプヒンの立場も極端なる場合に之を可としたるが如し、ベザ及マイレナンの最も邪僻ある異端者の死に處せらるべきものありと言ひ、ベルキンスの無神論者の死に處せらるべしと云ひ、アルミニウス派、獨立派、英國教會の自由派、特にクエーカー派の徒の寛容を可とし、浸禮派の徒ローシャイ、ウヰリアムス及彼の祖述者も亦自由を可とせり、祭司職に關しては、羅馬教會とプロテスタント教會の其説を

正反對にせり、プロテスタント派の徒の一切の信徒の祭司にして牧師の總ての人の僕ありと云ひ、又教會政治の外形の各自の撰擇に任すべきものにして、監督職の神命に基くものにして、非すと云へり、一千五百八十八年にバンクロフトの清教主義の欠點に對し、監督職の神性の權力及裁可に基けるものなりとの説を奉じ、而して此説の速かに弘布せり、プロテスタント派の徒の羅馬教會の眞教會の一部分なりとの説を否定し、法王を呼んでキリストに敵する者と稱せり

禮典に關しツヰントの大會に掲げたる説を概括すれば左の如し、
 (一) 禮典の數の七個なり、
 (二) 禮典の人の義とせらるゝに欠くべからざる者にして、人の之を受くるか若くは少くとも之を願ひざるべからず、

(三) 禮典の各々特有の神恩を含蓄し、而して之を執行するに依り、人此神恩に與るを得るあり、

(四) 之を執行するに當り、祭司たるものは之を執行せんとの意向を有すること必要あり、

(五) 洗禮、堅信禮、及聖職の三禮典の受領者より消抹すべからざる徵証若くは性質を印象し、洗禮を受けずして死する嬰兒の救はれず、

と是なり、

プロテスタント派の徒の一般に唯二箇の禮典をのみ奉じ、而して此徒の中誰一人も明から様に洗禮を受けざる嬰兒の救はるを得ずと云へるもの亦く、禮典の神恩の徵証及印象なりとせり、ツヰンギリ及アルミニオン派の徒の禮典の唯表號よして、弟子たる性質を與ふる共通の手段なりとの説を奉

せり、カルピンの之より信徒の心情に於ける神恩の見へざる働の機會なる文字を加へたり、去れど「此等の者(禮典)の聖靈の力に依らずして唯自からの力のみにてハ神恩を與ふる者にあらず」との一句の、ウエストミンスター神學者の加へたる者あり、

ルーテルの羅馬教會と同じく、禮典を以て神恩を受くる機關たる手段とせり、去れど羅馬教會が唯外部の儀式を信するの信仰を要求せしに反して、ルーテルの其與へらるゝ、神恩を把る信仰を有せざるべからずと云へり、

羅馬教會ハ此時より至るまで、洗禮の罪科を消抹し、腐敗を革新し、完全なる信仰を供給すとの説を奉じ、且洗禮を受けざる嬰兒の原罪の故を以て死に至るとの説を奉せり、

ルーテルの洗禮に關し羅馬教會と同一の説を奉せしも、信者

の小兒よして受洗せざる者の、尋常一樣あらざる神恩よよりて、特別よ救ひれ得ると考へ、且洗禮の心靈上の恩徳を受くる効果ある中保にして、罪の赦免と心中の革新を與へ、幼穉ある小兒も之によりて同様の恩徳よ與り、且嬰兒の心中に眞正の信仰を奮ひ起さしむる者なりと云へり、

リフホームド教會のルーセラン教會より洗禮に重きを措くと寡なく、英國々立教會の三拾九箇條の洗禮を以て復生の徵證、教會よ聯あるの手段、赦免の約束を受け神の子とあるの手段、信仰を堅くし且神恩を増し加ふるの手段とせり、

ルーセラン教會の嬰兒の洗禮を權利特權となし、リフホームド教會の之を欠くべからざる者とせり、

ルーセラン派の徒の洗禮の小兒を神恩の聖約よ入らしむとの説を奉じ、リフホームド教會の洗禮の小兒が既に聖約の中

よありてキリストの躰の股たる徵証ありと云ひ、ルーセラン派の徒の嬰兒の受洗の時信仰心を働かすと云ひ、リフホームド教會の徒の然らずと云ひ、此二派の他に嬰兒の受洗の時復生すと教へたるものもあり、

ツシナスの洗禮の永久に人たる者之を受領せざるべからずとの趣旨を以て立てられたるものなるを拒みたるも、ツシニアン派の徒の一般に洗禮式と晚餐式を守り、且嬰兒の洗禮を許容したり、

晚餐式の宗教改革時代よ於ての争論の大問題にして、化躰説の否定の縲縛、酷責、殺害の機會とのなりぬ、ペンリー第八世の御宇よ最大の罪科の焼殺の刑に處したり、而してプロテスタント派の徒の中にも亦烈しき争論を見たり、

ツレントの大會の議決したる説に曰く、麵麩及葡萄酒を聖別

したる後、キリストの真正の躰及血、靈魂及神性の此麴及葡萄酒の内に存し、躰も血も共に此二元素の内に存在し、而して此二者共に神として禮拜さるべきものなりと、該大會の麴のみを平人に與ふることを批准し、且「マス」の生者と死者のため、贖罪的犠牲にして、此式に於て捧げられたる犠牲の十字架上に捧げられたる犠牲と同一物なりと云へり、希臘教會の説の羅馬教會の説と大同小異なり、

ルーテルのキリストの真正の躰の存在を説きしも、其説の化躰説に非ず、其躰説あり、其説に曰くキリストの躰及血の麴及葡萄酒の二者の内にあり、此二者と共にあり、且此二者の下にあり、而して其存在するの唯此儀式の執行中のみありと、斯くてルーテルの「マス」及贖罪的犠牲の思想を拒み、且平人に杯を與へざるの冒瀆なりと云ひ、且キリストの躰の遍在し、神の

右の手の在まざる處あり、キリストの其人性に於ても在まざる處なし、去れど特は晚餐式の中に存すと教へたり、リッホームド教會に於てツヰンギリの教へ曰く、キリストの語の唯譬喩的にして麴と葡萄酒の唯表號あるのみ、晚餐式に於て信者の表白する所のキリストの弟子となり、忠節を盡すの一念もあり、又其受くる所の愛と交誼の徴なりと、

カルピン曰く榮光を受けたるキリストの人性の靈性の徳若くは力の源として、此力の聖靈の媒によりて與へらる、故にキリストの躰の力と徳を以て存在し、キリストの躰を食ふことの信仰の道によりて生ずる全然心靈的のとなりと、ウエストミンスター信條の中庸説を探り、神秘的なるカルピンの説に偏せず、而も亦靈性の神恩に重きを措かざりき、ツレントの大會の議決によれば、懺悔の受洗後罪を犯したる

者にの必需なり、且悲痛、表白、及賠償も亦必需にして、其中賠償の現世の刑罰を消抹し、赦さるべき罪の表白するよ及ばざるも、死に至る罪の表白せざるべからず、罪を赦すの權を有する者の唯監督と祭司のみ、「我爾を許す」てふ語の祭司の語るべき語にして、是れ裁判上の行爲なり、吾人は故意よ己が身を罰するか、若くは祭司より罰を被らせらるゝか、若くは攝理によりて來る懲戒を忍耐して耐ゆるにより、神よ賠償をさすを得るありと、

プロテスマント派の徒の懺悔の教理を承認せず、ルーテルの表白をなすことを許容したるも之を命せず、リフホームト教會の私よ若くは會集の内において罪の表白をなせよ、耳を附けてなすの非なりと云へり、

ツレソントの大會に於ては、夫妻の別居を許容する理由として

種々の事故を承認したるも、一旦結びたる婚縁の姦淫の故を以ても尙ほ解き離すを得ずと云ひ、且一旦童貞セリヤンを公言したる僧侶の正當に結婚の約を結ぶを得ず、加之結婚せざるの結婚するに優れりと云へり、プロテスマント派の思想の羅馬教會の反對に出で、姦淫の故あれば一度結びたる婚縁の解き離され、再婚するも不可なしと、

降りて近代に至れば、宗教上の自由の一般に行はるゝよ至り監督教會の高教會派の其政治及僧職が使徒よりの繼續あるとよ就き新約書の權威を主張し、之よ反して廣教會派の大監督ホエルトレー及デイーン、スマンレーを頭とし、正反對の説を唱へたり、

一千八百六十九年乃至七十年のバチカン大會の、法王を以て權力に於ての競争者もなく、同等者もなく、普天の下肩を比べ

得る者なき、絶對無謬の君王となし、而して大會は唯法王の命令よりてのみ集會するを得、法王の敕命を無効とするの權なく、唯勸告を與ふるを得るのみ、且法王の信仰と道德の事柄に關しては無謬ありと云へり、而して其理由とする所を聞く、曰く無謬の裁判者の必要あり、故に茲に其人ありと、プロテスマント派中、ルーセラン教會の合理派のツヰングリーの禮典説を奉じ、保守派のルーテルの説を奉せり、神秘説則ちキリストの神人的生命が禮典によりて傳へ與へらるゝとの説を奉ずる者もあり、去れど一般に行はれたる説よれば、禮典の神恩の徴證且印象に外ならず

洗禮は唯比較的に大切なり、洗禮を受ざる小兒とても滅亡に陥るの憂なしとの説行はれ、嬰兒の洗禮よの重きを措かず、而して夥多の監督教會の徒のウエスレーと同じく洗禮の復生

説を奉せり、

ルーセラン教會に於てはルーテルの信奉せし眞跡現在説今尚行はる、去れどカルビン主義の徳力現在説を採るものもあり、英國々立教會の禮典派の如き、眞の現在説を奉ずるものもあり、之よ加へて神秘説も亦行はれたり、去れど一般に弘く行はれたる説の變形カルビン説なり、

第十一項 來世論の略史

吾人は今茲に來世の問題に關し基督教會内に行はれたる諸説の概略を掲げん、

キリストの千福年前の降臨説のポリカール、イグチシアス、テシアン、アセナエラス、若くはセオフレアスの著述中、吾人よ傳はれる者の内には見出だされず、去れどジョスチン、マータイ

アイレニアス、テルトリアン、及バビアスの此説を主唱せり、其説は曰くキリストの身自から千年間君臨し、而して後地球の滅さるべしと、第二世紀の終頃より此説の反動起り來り、第三世紀の間此説益々衰へ、而して第四世紀の始頃より殆んど消滅して舊廢し歸せり、蓋し全世界が既に基督教の主權の下に來りたるを以て、キリストの降臨を願ふの大願望自然に消へ失せたるよりなるなり、

初代の師父の想へらく、陰府の正義ある死者の靈魂も、邪惡ある死者の靈魂も、共に住する場所あり、去れど其異なる點の陰府中に於ける地位と有様により、然り而して殉教者を除くの外、萬人悉く復活の後に至るまで此處に留り居るなりと、去れど後の代に至り、キリストは死に打勝ち給ひたれば義者の直に「パラダイス」に行くとの説行はるゝに至れり、初代の師父の

人間肺腑の實際復活説を奉じ、ノスタック派の徒の復活との唯譬喩的の語なりと唱へ、此二説に反して通常一般に行はれたる説に曰く、現世の肺腑の本腑の復活腑の中に存し、而して聖徒は此地上に生活すべきものなりと、オリガンの靈腑なる者なりと云へり、

終末の裁決に關して初代の師父の懷きたる説は是れなり、曰く現世の一生涯に於て福音を御けたる者の死後に望なく、悪人は現世を離れて大審判の日に至る中間の時期に於て、既に一定の罪責を受くべき者なりと、然り而して大審判の判決の無窮に至る者ありとの殆んど普通の信仰なりき、

教授シエルトン氏曰く「大多數の著述家の來世の刑罰を叙するに新約全書中の最も強き語句を引用し、何等の制限をも之に加ふることなく、且夥多の實例に依りて、彼等が用ひたる一種

特別ある文字若くは其思想の大傾向を見れば、何等の制限をも此處に許容せざることを示すなり」と、而して氏は此斷言を證せんがため、長き引照の列を掲げたり、(教理歴史第一卷第百五十三頁を見よ)、唯之が例外たる者のアルノピアス其人にして此人の終末消滅論を唱へたり、

シヨスチン(辨證論第八章)の悪人の刑罰は永遠なる文字を適用して一千年説に反對し、アレキサンデリアのクレメントの云へり、一切の靈魂悉く不滅ならざるなし、不朽ならざる方寧ろ優れる悪人の靈魂も矢張不滅の域を脱せず、蓋し悪人の靈魂の消すべからざる火の無限の苦痛によりて罰せられ、然も死するとなき、斯くて無極の災禍を蒙るなり」と
オリシンの無終試練説及萬人或は恢復するところあるならんとの説を唱へたり、此説の神の仁惠及人間の自由意志を以て基

礎となす、去れど一落一復或は窮極する處を見ざるべしと、クレマンシアスなどは聖書に所謂地獄の火とは文字通の意義を有する者にして、實際の火を指して云ふなりと云へり、去れど之と説を異よし、神より分離するは悪人の苦痛の大原因として、此に加ふるに罪科ある良心の苦痛なりと云へる人あり、一般に初代師父の間に行はれたる説によれば、キリストが其全き榮光の中に位するを見、且キリストと親密なる交際をなす、是れ天の幸福の大部分をなす者なりと、

前記既に陳べし如く、第四世紀以降、キリストの千福年前の降臨説の殆んど舊廢は歸せり、オリゴスチン曰く「千年」とは世界歴史の最後の千年、若くは世界存在の全時間、を意味し、聖徒の君臨との教會の主權の意味なりと、

第四世紀より第七世紀に至るまで、死の日と大審判の期の間

は横はる中間の有様は關し、一般に行はれたる説に曰く、義人の死後直は福ある場所に入り、而して一層完全なる天の福祉を待つ、之に反して亡者の異なる場所にありて、終末責罰の苦を預じめ味ひ居るなりと、或は不完全なる義人のため火の煉獄ありとの説を奉ずる者あり、オーゴスチンの臆測説として此説を奉せり、グレゴリー、セー、グロートは此説を確信し、而して羅馬教會の煉獄説の綱領を設け、教て曰く、不完全なる信者の其處に行き、此世にある信者の祈禱及供物の彼等の放釋を速かならしめ、且晚餐式の供物の其處に於て大價値を有すと完全なる義人の靈魂の死後直は「パラダイス」に入り、充分なるキリストとの交通の中は享受せらるゝとの説、一般は行はれたり、

シエローム及オーゴスチンは堂々と復活の字義説を唱へ、ユ

ノスタンナノールの監督ユーテキアス(Eutychius)は第六世紀は無感覺躰説を唱へたり、去れど其書の罪せられ且焼かれたり、アレキサンデリアのフェロポナス(Philoponus)は人間復活の日は、全然新しき躰軀の別は創造せらるゝならんと云へり、加ふるは字義説も亦行はれたり、該説に曰く、復活躰の現世の躰と同一の本質を有するも、異なりたる有様と性質を以てす、要するに復活躰の變形せる完全なる靈躰ありと、オーゴスチンの復活躰に就て教ゆる所の左の如し、

(一) 復活躰の世界の終末に火災を以て潔められたる物質を以て組織せらるゝ、

(二) 復活躰の生命を保つに物質的食物を要せざるも之を受くるを得、

(三) 復活躰の其重量のために運動を障げらるゝとなく、恰も眼

の端倪するが如く、迅速に任意に運動するを得るならん、
 (四) 一切の復活躰悉く壯年の形状と齡を以て現るべし、
 終末の裁決に關し異見を抱く者少しく彼處此處にあり、特に
 東方教會に其人ありたるも係らず、教師及神學者の多數の
 惡人の死後何等の望もなしとの説を奉せり、第四世紀の終り
 頃、ニッサのグレゴリーは一切の刑罰の勸善懲惡の主旨に基
 く者にして、一切の道德上の罪惡の終りに消へ失せんと云ひ、
 アレキサンデリアのデトマス、マルソンのテオドロス及モナシ
 ユーステアのセオドールの此と説を同ふせり、去れど西方教
 會中の卓越せる士にして、此と同様の説を奉ずる者は一人も
 擧ぐるを得ず、アムプロースの鍊獄の鍛鍊を経ざるべからざ
 る信徒中に、上下の差別あるとを信じたるも、不義の徒のキリ
 ストと何等の關係をも有せずと思へり、

第五世紀の始頃、恢復説の異端と見做され、前記の例外者を除
 くの外、第四世紀以降第八世紀に至る間の卓越せる著述家の、
 悉く惡人の刑罰若くは消すべからざる罪責に就て語るも何
 等の制限をも設くるとなし、去れど刑罰の度には輕重の差あ
 りとの説を奉ずる者あり、而して西方教會の字義通の火の罰
 ありとの説を奉せり、

紀元一千年より先立つ時期中に、千福年の益に進み來り、紀元一
 千年に至りて世界の終の來るならんとの思想弘く擴がれり、
 宗教改革前の時代に行はれたる説によれば、一切の不信者の
 死後直に地獄に行き、一切汚點を有せざる信者の直に天に行
 き、而して不完全なる信者の純白の身となる迄に鍊獄に留り、
 其鍊獄にある時間の長端の其腐敗の量と、生者が給すの供物
 施賑及祈禱によりて與へらる、扶助の量に比例すと、ウヰッ

クリフの鍊獄の教義に反對せしも、一千四百三十七年フロレンスの大會の此教義を可とするの布令を發せり、

第九世紀にエリゲナの刑罰を以て主觀的作用となすの傾向を有せしも、一般に奉せられたる説によれば、刑罰との軀軀上の苦惱を有する永遠の刑罰なり、然り而して刑罰にも夥多の差等あり、舊約時代の聖徒がキリストの放釋に逢ふまで住居する所は陰府中の最高所なりと、

ピーター、ロンバードの受洗せざる嬰兒の刑罰の單に何時迄も神を見る能はざるは基くものなりと云ひ、異教徒中罪の輕き者の有様に就ても之と同様の見解を抱き、且天にも上下の階級ありと想へり、

吾人の亦凡神説の端緒が神秘論者たるエリゲナ及エクハルト(Eckhart)の教ゆる所となりたるを見るなり、其説く所を概括

せば左の如し、曰く軀軀の之を組成する地上の諸元素に分解し且歸るべし、復活の時の人各々先に自己の軀を組成せる本源の諸元素より自己の軀を受け、其軀變じて靈となり、其靈と共に、終に、人性其者の其諸原因と共に、恰も空氣の光明中に動き入る如く、神の中に動き入るなり、蓋し神の宇宙間に己の外何物も存在せざる時に、全の全なればなり」と、

宗教改革時代より、プロテスタント教會内よ於て、千福年前基督再臨説の一般に卻けられ、唯幾分の神秘論者とアナバプテスト派の徒のみ之を信じたりき、人間の目に見ゆる基督地上君臨説も亦一般に奉せられざりき、加之、プロテスタント派の徒の鍊獄の存在を否み、義人の直に天よ昇りてキリストと共にあり、悪人の直に地獄に降り、且世の終に人類全軀の復活

及審判あるべしと云ひ、ソシニアン派の徒及幾分のアナバプテスト派の徒の人間の靈魂は死より大審判の時に至る中間の有様に居る間には眠り居る者ありと云ふ説を奉せり、羅馬教會の今尙は鍊獄説を信奉す、ベラミーン(Bellarmin)の説に曰く、鍊獄ある者の多分此地下にあり、而して火との物質的の火ならんと、希臘教會の鍊獄説は羅馬教會程明白ならず、該教會の鍊獄の何の處よあるやを知らずと云ひ、且字義通の火あることを教へず、去れど不完全ある信者のために鍊獄のある事實にして、其鍊獄にあるの時間の教會の祈禱と供物より短縮せらるると云ひ、且字義通の復活説一般に行はれたり、悪人が無極の苦痛を受くるとの殆んど普及の説ありき、唯之に異なる説を抱きし、幾分のアナバプテスト派の徒と、幾分のソシニアン派の徒あり、前者の恢復説を奉じ、後者の恢復説

を奉せず消滅説を奉せり、ウヰソワチアス(Visovatus)の書きたる「ヲユビアン」問答の註釋中よ云へるあり、曰く「神及キリストに順はざる者の、終末の審判の時甦へらされたる後刑罰に定められ、而して悪魔と其使のために設けられたる火に投げ入れらる、その常に此教會の持説なりき」と、ホッブス(Hobbes)の人間の靈魂の死後火よて一時の苦惱を受け而して消滅すとの説を奉せり、去れど恐くは此苦惱消滅の犠牲とある者の存在せざる時よからん、蓋し悪人の復活後も益々傳殖する者なればなりと、

羅馬教會及幾分のプロテスタント教徒の火炎を以て來世の刑罰の一要素なりと考へたるも、多數の然らず、此點よ就て何等の意見をも吐露せざるか、然らざれば聖書の此等の文句に就ての譬喩的解釋に傾けり、英人ホヰリチコート(Whicheote)の地

獄の薪の人間の良心の罪科なり」と云ひ、ウヰリアム、シャイロツク(Wm. Sherlock)の「人の罪人たる限の災禍の中は居らざるべからず、而して其人の決して悔改むるときは故常に災禍の中に居らざるべからず」と云へり、
 降りて現時に至れば、千福年前説の獨逸及英國に於て、ホフマン(Hofmann)、デリッツシエ(Delitzsch)、ローテ(Rothe)、ピツケルストツス(Bickerstoh)、「ボナー(Bonar)等、及合衆國の或人々を主唱せられたり、去れと神學者の持説の輕重を料れば、寧ろ此説を反對する者重をせり、
 死より大審判の日に至る中間の時期の有様に關し、カーニス(Kahnis)、ドルナル(Dorner)、マルチノー(Martineau)等の信者の性質の死後、潔めらるゝを要すとの説を奉せり、
 字義通の復活説の跡を收め、合理學派の全然之を否定せり、左

よ掲ぐる諸説の近頃行はるゝ説あり、

- (一) 萌芽説、曰く現世の躰軀中より來世の躰の見るべからず且滅す可らざる萌芽なりと、ブロン、オーステルシー(Van Oosterzee)の此説を可とす、
- (二) デリッツシエの現世の躰軀の元素的實躰の復活躰に入るとの説を可とするが如し、
- (三) スヴェーデンボルグ(Svedenborg)曰く、靈躰の物質躰と共に存在し、而して人の死せし時其靈魂の靈躰を被り、目を醒して他界の生命に入り、今日尙ほ斯の如き説を持する少數の士なきにあらざるも、一般の信奉せられず、
- (四) 今日最も普通に行はるゝ説は是なり、曰く現世躰と來世躰の同一との物質上の同一の意義は非ず、自然躰と靈躰との二者の中に同一の組成的原力の存するとは是なりと、

基督教徒の大多數の、特に合衆國に於ては、惡人の無極苦痛説を信奉せしも、歐洲大陸及英國に於ては、或種類の人物のため死後の試鍊ありと云ふ者其數尠ならず、例せばドルチル、マルテンセン(Marlensen)及カーニスハの此説を教へ、アムトパー神學者の此説の多分眞からんと云へり、シュライエルマーヘル(Schleiermacher)及シュニプツェル(Schneizer)の萬人悉く恢復するの期あるならんと云ふ説を奉じ、オルシヤウセン(Olshausen)の其説を可とあせしも之を教ゆるの愚かりと云ひ、英國に於てはモリス(Maurice)及カノン、フラー(Canon Farrar)の來世に望を有すべき理由ありと教へ、其他惡人の消滅説を奉ずる者もあり、來世の罰との自から被れる詛にして、己の罪科ある決心よりて罪惡の中に縛られたる靈魂に無窮に附隨する者なりとの説、一般に行はるゝに至れり。

第三篇

第十九世紀獨逸神學畧史

第十九世紀獨逸神學の興る前に、種々の哲學系統あり、而して其哲學たるや、獨逸人の思想上、強大なる影響を及ぼし、且吾人が今語らんとする神學系統に大影響を與へたる者なり、特にカント、フヒヒテ、シェーリング、及ヘゲルの如きは皆、第十八世紀の後半、第十九世紀の發端に、強大なる勢力を有する哲學系統を立て、且此等の人物の皆獨立獨歩する眞理の一系統を見出さんと試みたり、前に哲學畧史中にも云ひし如く、カントの道義の意識を重せしも唯心説に走り、フヒヒテのカントの哲學系統を敷衍して絶對主觀的唯心説となし、シェーリングの一步進んで絶對客觀的唯心説とあり、ヘゲルに至りて絶對的唯心説となれり、此等の哲學系統の合理説の道を備へ、合理